
夕暮れ廃墟倶楽部

星椋歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕暮れ廃墟倶楽部

【Nコード】

N6963U

【作者名】

星棕歩

【あらすじ】

廃墟が大好きな僕。広い平原に一本だけ残る橋げたのふもとで、一人のんびり過ごそうと考えていたのに。そこには見知らぬ可愛い女の子が。

「ねえ、私たち、集まらない？」

成り行きで作ってしまった彼女と二人っきりの秘密の集まり、夕暮れ廃墟倶楽部。

今日も僕は夕日と共に廃墟に向かう。愛するあの場所であの子に会うために。

その1

僕の趣味は変わっている。

廃墟めぐりだ。

学校が終わった後、自転車を飛ばしてススキ野原へ向かう。そこは高速道路のわきにある一面の平原。かつては家が建ち、電車が走っていた形跡もあるけれど、今ではその残骸が点在するのみ。僕はそこに退廃の美学を感じ取る。

電車の高架。橋げたが一本だけ残り、その上にはほんの数メートルだけ線路が残る。どこへ続いていたんだろう。きつと図書館で郷土史を調べればわかるに違いない。だけど、そんなこと、どうだっていいんだ。こんな巨大な橋げたが、何か目的を与えられたかのようになりぼっちで残されている。誰が、何の意思を持って？周りを見渡しても、そんな巨大建造物は他にありはしない。これはただ野原の真ん中で、いつからなのか、何の役に立つでもなく、じつと息を殺して時の流れに身を任せている。僕はそのふもとへ近寄って無機質なコンクリートの柱を手でそつと撫でた。ところどころ内部の鉄筋が飛び出し、赤茶けてうねるそれはまるで血管のようだ。

こういう場所で僕は一人思索するのが好きだ。さあ、もうすぐ夕暮れがやって来る。ススキ野原で風が吹く。ススキたちは冷たい風に吹かれていつせいにせわしなく揺れるだろう。高い空の上では、黒い雲たちが素早く流れていくに違いない。夕日を浴びて真っ赤になる橋げた。

誰も来やしない。こんな所に来る用事もない。忘れられた遺跡のよ

うな無為な建造物を愛する人間以外は。そんな変わった人間、滅多にいやしないさ。少なくとも、僕の周りには一人もいない。

僕は迫りくる寂しさと孤独さを感じ、そしてその甘美さを存分に楽しんでいた。

なのに、あの子は見ていたんだ。

「楽しそうね」

誰かが僕に話しかけた。橋げたの柱の向こう。誰かがいる。

「だ、誰？」

こういう場所はとても不気味だ。だから僕は好きなのだけれど、一人であるはずの場所で誰かに突然話しかけられる恐怖を察してほしい。

「くすくす……」

笑いながら柱の陰から姿を現した。女の子だ。僕と同じくらいの歳に見える。どこかの学校の制服を着ているけれど、僕と同じ学校でないということぐらいしかわからなかった。

「素敵ね、こじ」

女の子は僕に少しづつ近寄りながら橋げたを見上げている。長い髪がまっすぐ地面に向かって垂れ下がっている。それが吹き抜ける風になびいてさらさらと揺れた。

「私、こういう所が大好き」

女の子は僕に笑いかけた。

「あ、ほ、僕も……」

突然のことにとぎまぎしてしまつ僕。

「あなた、よくここに来るの？」

「え、ええと。わりとよく……」

「ねえ、私もこれからここに来ていい？」

僕に断つたり許可したりする権利はない。ここは僕の土地じゃないし、この橋げたは僕の所有物でもない。ただ、ずっと独り占めしていた安らぎの場所を暴かれるような、そんな嫌気を少しだけ感じていた。

「だめかな？」

女の子はいたずらっぽいで僕を見つめている。大きな目だな、と僕は思った。

「こ、こんな所、何が面白いんだ……」

「あら、くすくす」

女の子は可愛い笑い声をあげた。

「あなたはよく来るんでしょ？ どうして？」

分かるもんか、僕の気持ちなんて。誰にも僕の哲学を覗くことはできないぞ。

「ひと言じゃいえないよ」

「そう、わかったわ」

女の子はあっさりと引き下がった。もともと僕には興味がないのかもしれない。

「でもね、私は、ここが好き。ううん、面白いとか、そんなんじゃないの」

女の子は笑うのをやめて、ふっと無表情になった。

「……へえ」

曖昧な返事しかできない僕。

「ほら、夕暮れよ。赤って素敵ね」

女の子が夕日を指さした。橋げたも、彼女も、赤く染まっていた。もちろん僕だって染まっていたけれど、僕のそれは夕日のせいだけじゃない。

「……僕、こついつ風景が好きだ。空気も好きだ」

「うん、わかるよ」

女の子はまた僕に笑顔を見せた。夕日に染まったその笑顔は、本当に可愛かった。

「あの、いいよ。来てもいいよ。だけど、騒いだりしないでほしい」
思わず女の子に許可を出してしまう。少しえらそうだったかもしれない。

「ありがとう。うん、騒いだりしないわ。だって、そんなのもったいないでしょ？」

「もったいない？」

「……風の音。この子もしかべりたがってるわ」

女の子は柱をゆっくりと撫でている。そんな発想、僕はしたこともなかった。でも、彼女は僕の愛する美学をわかってくれそうなの、そんな気がする。

「そ、それから……このこと……」

「ううん。言わないわ。私たちだけの秘密」

何だか淫靡に感じた。うん、この女の子となら僕の秘密を共有してもいいな。

「ねえ、私たち、集まらない？」

不意に女の子が嬉しそうに言った。

「あ、集まるって……」

「夕暮れにね、ここで集まるの。そして静かに時間を過ごすの」

「どづいづいとっ」

「えっとね……しいて言うなら、倶楽部みたいなものかな？」

「倶楽部……」

「邪魔はしないわ。お互いにね。ただ、ここを好きな私たちが一緒に過ごすの」

「うん……」

「どづづ？ 素敵じゃない？」

僕の答えは決まっていた。僕と似たような人がいた事を知って、僕の心はとても弾んでいたのだから。

「い、いいよ」

「ほんと？ 嬉しいわ。じゃあ、私たちの倶楽部の名前を決めましょ」

そんなものが必要なのか、僕にはわからなかったけれど、嬉しそうにはしゃぐ彼女を見て、それはきつととても大切なものなんだろうと感じた。

「えっと、じゃあ、廃墟倶楽部……とか」

「うーん、そうね。それだけじゃ私たちの特別な集まりには平凡すぎるわ」

僕はさっきから胸がドキドキしている。こんな事、一人で廃墟にいた時にはなかったことだ。これはゆゆしき事態なのか……それとも……。

「そうだ、夕暮れ。きれいな夕暮れが大好きなんだもの、私たち
私たち、と言ってくれたことが僕にはとても嬉しかった。この子は
まるで、さっき会ったばかりの僕のことをもう何でも知っている
みたいだ。」

「夕暮れ廃墟倶楽部。ふふっ、素敵だわ。とても素敵」

女の子は笑いながらくると回った。スカートがふわっと開く。ま
すますドキドキするじゃないか。

「じゃあ、約束ね。部長さん」

女の子がくすくすと笑いながらスキ野原を走り去っていく。ああ、
今日はもう終わりなんだ。あれ？

「部長………?」

そっか。僕が倶楽部の部長なのか。だんだん遠くなっていく彼女の
背中。僕はその背中をじっと見つめていた。やがてちっとも車の通
らない道路に出た彼女は、こっちを振り返って手を振った。僕は照

れくさくて、胸の前あたりで小さく手を振りかえしたただけだったけれど、果たして彼女に見えていたのかどうか。

ひゅっゅっゅっゅっゅ

冷たい風が頬を刺す。だけど僕の体は熱かった。柱にもたれかかり、そのまま腰を下ろす。しばらく流れていく雲を見ていた。やがてそれは真っ黒になり、空も黒くなった。

「あの子、そうだ……名前……」

名前、訊き忘れちゃった。

その2

「何か嬉しそうだな、お前」

授業が終わって急いで教科書をかばんにしまっ僕を見て、端島が近くに寄ってくる。こいつは僕の友達だ、だが親友というわけじゃない。普通の人間にはよくいるしゃべり友達という程度なのに、僕には友達自体がほとんどいないので、周りの連中からは親友同士と思われるようだった。

「顔ニヤニヤさせてんぞ、朝からずっと」

端島は小ばかにするように僕に言った。こいつに僕のことは微塵もわからない。僕が愛する廃墟のことも、なぜ僕が嬉しそうなのかも。

「あ、ああ……最近成績が上がってきてるから」

適当にごまかして早々に立ち去ろう。

「うっそつけ！ テスト返された時はやたら落ち込んでたくせに！」

こいつはなぜか僕の言動をよく知っている。本当に気持ち悪い奴だ。今だって放っておいて欲しいのにこうして勝手にそばにやってくる。

「な、何でそんなこと知ってたんだよ……」

「は？ お前が言ったんだろが、俺に。」「こんな点じゃ家に帰れない」って」

そつだ、思い出した。僕はこいつにひとしきり愚痴つた後、廃墟に向かつてそこで一人ボーっとしてたつげ。あの時も僕のオアシスである橋げたは僕を優しく慰めてくれた。こいつと違って。

「なあ、どうしたんだよ。あ、さてはお前」

端島を無視して帰ろうとする。僕にはこいつに構ってる時間なんてない。早く夕暮れ廃墟倶楽部に集わなきゃ。

「好きな子がいるな？ そつだろ？」

端島が笑いながら俺の背中に叫んだ。こいつ、妙に勘がいいからいつかはバレルだろうと思っただけ、こんなにも早くバレてしまつとは。いや、僕が隠すのが下手なんだ。

「何言つてんだよ、ばか」

僕は捨て台詞を吐きながら自転車置き場へと向かう。そつか、やっぱりこれは、恋なのか。あいつに言われて、何か言いようもないしつくり感があつた。からかわれてるはずなのに、どこか心地よくも感じた。

好きな子、か。

あの子の名前も、どの学校に通っているかも、何もわからない。でも、今日も二人つきりで会える。昨日のあの夢のような出来事が、本当に夢でなかったのなら。僕は自転車置き場に思いつきり走つて行き、自分の自転車のカゴにかばんを放り込んだ。

「ねえ」

突然後ろから呼びかけられる。振り返ると、そこには知らない女の子が。もちろん、あの子じゃない。

「確か、地学部でしょ、あんた」

「へ？」

僕はどの部活にも属していない。いや、それは正確な言い方じゃない。この学校は、必ずどこかの部に所属しないとイケないことになっている。それで、僕は適当に所属部を決めた。帰宅部の巣窟と聞いていた、あの部へ。たしかそれが……。

「地学部なのよ、あんたは」

女の子は僕に何だか怒ったような口調で言った。

「へ、へえ」

「当番よ、今夜。いいわね？」

「な、何の……」

「まったく！ 一度も顔を出さない人間が何十人もいるんだから！
いつも探してるこっちの身にもなってよ！」

「あの……」

「いいわね！ 今夜七時！ 地学部室！」

「ちょ、ちよつと!」

「何よ」

「君、だれ?」

「兵庫よ! 兵庫摩耶! 部長のことも知らないなんて!」

そついえば、そんな名前だったかな……。所属後の見学会でそんな名前を聞いたような気がする。

「それで、兵庫さんは僕に何をして欲しいんでしょうか……」

あまりの威圧感に僕は自然と敬語になってしまう。

「天体観測準備! 部員が持ち回りでやるのが決まりなんだから! 帰宅部だったって、ちゃんと活動には貢献してもらおうよ!」

「ああ……そつ……」

地学部って、空も見るんだ……。

「ちよつと急すぎるので、また今度ということ……」

「ダメよつ! あんたのことずつと探してたんだから! もう三日も!」

何で探す必要があるんだよ……さっさと伝えに来ればいいのに……。

「ほんつと! あんただけじゃないけどさ! 自分のクラスも書か

ないし、写真撮影にも来ないし！」

兵庫さんがうんざりしたように言う。そうだった。適当に書いたからもう何も覚えていない。僕は校舎に据えつけられた時計を見上げた。四時半か。廃墟倶楽部で過ごして、日が暮れたら戻ってきて……。七時には間に合うかな。

「わ、わかったよ。七時に来ればいいんだろ」

僕は急いでいるんだ。用が済んだらさっさと行かせてほしい。

「いいわね！ 絶対来るのよ！ 先輩の命令なんだから！」

兵庫さんは一人で大騒ぎした後、さっさと走って行ってしまった。地学部、ねえ。突然活動に駆り出されるなんて、何だか不思議だ。……そういえば。

「そっか、部長だから、僕より先輩なんだ」

兵庫さん、いや、兵庫先輩はそれで僕のことを知らなかったんだ。自転車を走らせながら地学部のことを思い出してみた。だめだ。どんな部だったか、どんな部員がいたかさえわからない。

「いいや、どうでも」

僕は昨日からあの子に会えることが楽しみで仕方がなかった。もちろん廃墟だって好きだ。でも、僕が今日廃墟に向かう目的は、昨日までのそれとは明らかに違う。

「はあ、はあ……」

僕は思いつきり自転車をこいだ。あの子、もう来ているだろうか。今日はちゃんと名前を訊かなきゃ。弾む息と胸を必死に押さえながら、僕は廃墟へと急いだ。

橋げたは遠くからでもよく見える。この街は寂れている。昔、ここに大きな炭鉱があつて、たくさんの人でにぎわつたというけれど、今ではその面影は微塵もない。親から聞いた話だと、たくさんホテルが立ち並び、常に満員状態だつたらしい。今こうして辺りを見回してみると、まるでそれは別世界の話のようだ。一面のススキ野原。ところどころ残る建物の壁。やたらきれいなのに車の全く通らない道。

「いるかな……」

僕はいつもの場所で自転車を降りると、ススキ野原に入っていく。そのまま小走りに橋げたまで近寄つていった。

「す、すみません……」

近くまで来て、とりあえず声をかけてみる。

「じつちよ」

いた。僕の胸は高鳴つた。橋げたの柱の向こう側へ回ってみると、地面に落ちた大きなコンクリートブロックの上に、彼女はいた。

「じんにちは」

微笑みながら僕を見ている。昨日はまともに見られなかった彼女の

顔、やっぱり可愛い。

「あの……遅れちゃって」

「早いも遅いもないのよ。だって、そういう所でしょ、」
「……って」
彼女が楽しそうに笑った。

「それに、ほら。まだ日が沈むまでは時間があるわ」

「うん……」

僕は突っ立ったまま情けない声を出す。どうしよう……そばに近寄るのは、やっぱり変かな。彼女はコンクリートブロックに座ったまま、空を見つめながら足をぶらぶらさせている。そうだ、名前を訊こう。彼女が誰なのか、僕はまだ知らない。

「あの、君……訊きたいことが……」

「ふふ、約束したでしょ？」

「え？」

彼女が僕の言葉をさえぎる。

「お互いに邪魔しない、って」

「……………」

その一言で、僕は金縛りにかかったように固まってしまった。どう

いうことだ？ 僕は彼女と話すこともできないって事なのか？彼女はこつちを見ながら、いたずらっぽく笑っている。そんなの、あんまりだ。

「邪魔しないよ！ しないけどさ」

「うん」

「名前だけでも、訊こうと思って」

「榛奈」

「はるな……さん」

「ええ、伊香保榛奈」

いかほはるなさん、か。何か珍しい名前だな。

「ありがとう、僕は……」

「ううん、いい」

「えっ……どうして」

僕の名前を教えようとした時、伊香保さんは再び僕の言葉をさえぎりながら、空を見上げた。

「だって、知ってるもん」

知ってる……？ 僕の名前を？

「ほんとなの？」

「うん。ほんと」

「じゃ、じゃあ、言ってみてよ！」

彼女が笑いながら口を開く。

「……会った事、あったっけ……？」

僕は自分の名前を知っている彼女が不思議でしようがない。

「ね、もう終わり。だってこのままじゃ、おしゃべりばかりになっちゃうもん」

彼女はコンクリートブロックから飛び降りて、軽やかに地面に着地する。

「あ……」

スカートがふわっとゆれて。

「……あ……見え……ない」

バカバカ！ 僕のバカ！

「さあ、夕暮れよ」

彼女は僕の動揺に気付く様子もなく、夕日を指差した。僕は彼女の

横顔を見る。紅く染まってはいるけれど、真つ白な肌だっということがよくわかる。ガラス細工のようにきれいな肌で、昨日もニキビができた僕の顔とは大違いだ。ほんとに同じ人間なのか……？

「きれいな」

彼女が口を開いて、僕は慌てて目をそらす。退廃的な場所にこんなに可愛い子がいるなんて、ひどく滑稽に感じた。

その3

「……………」

僕はぼーっと暗くなり始めた空を見上げていた。コンクリートブロック。彼女がさっき座っていたところだ。知らず知らずのうちにその場所を手で撫で回していたのに気付き、恥ずかしくなる。

「はぁ……………」

僕はさっきの彼女と同じように、そこに座って空を見上げていた。名前を訊いただけで終わってしまった夕暮れ廃墟倶楽部の今日の活動。後悔の念がつのる。僕は孤独を感じながら、さっきまでの彼女との時間を思い出していたのだった。

〃

「きれいね」

「う、うん」

彼女はそれっきり黙りこんでしまう。

「え、ええと……………」

一人で時間を過ごすのは慣れてる。だけど、二人で、それも可愛い女の子と一緒に、廃墟で過ごすなんて経験は皆無だ。こんな寂れた所で、僕は彼女のために何をすればいいんだろう？

「……帰るわ」

不意に彼女が口を開いた。そのまま僕に背中を向けて走っていく。

「え、え？」

突然の出来事に僕は動くこともできない。

「またね」

僕……何か怪しい動きでもしただろうか……。彼女は昨日と違い、一度も振り返らなかった。

〃

「はあ」

何度思い出してもため息しか出ない。

「あつ！ あんた！」

「……来ました」

「七時つて言ったでしょ！ 十分も遅刻してるわよ！」

あれだけ遠距離をフラフラになりながら走ってきて、ようやくたどり着いた地学部室。たったの十分の遅刻で済んだ事が僕には奇跡に思えた。そんな事を言っても、兵庫先輩の怒りの火に油を注ぐことにしかならないだろうけど。

「早く、こつちに来て手伝いなさい！」

兵庫先輩は部屋の奥でござと何かをいじりながら僕に命令した。しぶしぶ従う僕。

「何をすれば……」

「これ！ はいっ！ 持って行って！」

いきなり振り返った兵庫先輩に渡されたのは二つの大きな三脚。いっぺんに持つとかなり重い。

「ええと……」

「屋上よ！ 先行つてて！」

僕は屋上に行ったことがない。もちろん屋上入口がどこにあるのかは知っている。鍵、開いてるのかな。まあ、どうでもいいや。こいつを適当な場所に置いて、さっさと帰ろう。

「はあ……」

この気の重さ、何だろう。彼女と会えたじゃないか。しゃべることもできた。名前もわかった。なのに。

「期待……しすぎたかな」

重い足取りと重い三脚でフラフラする僕に、兵庫先輩が後ろから声をかけた。

「しつかりしなさいよっ！」

〃

屋上への扉は開いていた。

「さあ！ 入って！」

筆記用具やら本やらを抱えた兵庫先輩が僕に促す。後から追いかけてきた先輩に、僕は結局追いつかれたのだった。屋上に出ると。

「…………へえ」

こんなに広いとは思わなかった。普段立ち入り禁止になっていたその場所は、天体観測をする生徒のみが特別に立ち入りを許可される。兵庫先輩が歩きながらそう僕に教えてくれた。

「よいしょ…………っ」と

僕は三脚をフラフラになりながら降ろす。

「よっし！ オッケー！ じゃあ、ここに名前書いて」

「は？」

「は？ じゃないの！ 活動者氏名、ここよ」

兵庫先輩は一枚のプリントを僕の前に差し出し、懐中電灯で照らした。僕は鉛筆で自分の名前を書き込む。

「じゃあいいわ、はい！」「ご苦労様！」

プリントを僕の手から奪い去ると、兵庫先輩は僕に背中を向け、道具を整え始めた。

「あの、もういいんですか？」

「いいわ！」

何だか拍子抜けしてしまう僕。

「星とか、僕は見なくても……いいんですか？」

「……へえ。あなた」

兵庫先輩が振り返り、にやりと笑った。

「なかなか見込みあるわね」

「は？」

「もちろん！ 我が地学部は、積極的な活動を希望する部員は大歓迎よ！」

いや……積極的というわけでは……。

「白石！ 白石！ ちょっと来て！」

兵庫先輩が突然暗闇に向かって叫んだ。すると、暗闇の向こうに人が動いたような気配がした。それはゆっくり僕たちのほうにやって

来る。

「何だい、騒がしいな……おや」

その人影は一人の男子生徒だった。ものすごく背が高い。その人をひとりで形容するなら……かっこいい。

「ほう、珍しいね」

「今夜の幽霊君よ！ 活動に参加したいんだって！ ふふっ！」

「いや、参加とか、そういう……」

「ほら！ せっかく来たんだから、覗いていきなさい！」

兵庫先輩は今度は三脚に据えつけられたばかりの望遠鏡を指差した。どうしよう……そんな気分じゃないのに……。

「まあ、少しでいいから、遊んでいきなよ」

背の高い男子生徒が優しく言った。

僕はその場から周りを見渡す。夜の学校は別世界のようだ。寂れたこの街は、夜は特に暗い。空には満天の星。そして、地上には、淡い光を放つ高速道路。

……そうだ。あの近くに僕の廃墟があるんだ。こんな所から見るのは初めてだな。

「じゃあ、ちよつとだけ」

「そう！ じゃあ、白石！ 面倒見てあげて！」

兵庫先輩が嬉しそうに男子生徒に言う。

「わかったよ。じゃあ、幽霊君。望遠鏡、頼むよ」

「……はい」

僕は指図されるままに、望遠鏡を抱えて男子生徒についていく。どうやら彼の名前は白石というらしい。

「あの、あんまり人、いませんね」

目が慣れてきて、他の部員の姿を探しても、兵庫先輩と白石さんの他には数人しか見当たらない。

「ん？ ああ、こんなもんさ」

白石さんは飄々とした態度で言う。

「君は珍しいよ。ほとんどの帰宅部連中は、準備が終わったらさっさと帰っちゃうのさ」

僕だって、熱心に残ろうとしたわけじゃないけど。

「なあ、まあや」

白石さんが僕たちの後ろからやって来る兵庫先輩の方を振り返った。

「その呼び方はやめてって言うてるでしょー!」

「はは、まだ許してくれないのか」

この二人、同じ学年なんだろうか。白石先輩、か。

「天体観測は、天気が悪くなければ、毎週やってるんだ」

「そうなんですか」

「君も興味があつたら、またおいで」

白石先輩は僕に星座のたくさん書かれた円盤のような図表を渡すと、星の説明を始めた。僕は何だかここにいることが不思議になる。

「あの、すみません。星と関係ないんですけど」

「何だい？」

「僕はどうして、突然呼ばれたんでしょうか？」

白石先輩はそれを聞いて笑い出した。

「うちに、部員がどれだけいるか、知ってるかい？」

「え？ いや」

「ざっと総勢128人！」

「そんなに？」

「驚いたかい？ 実情はご覧の通りだけどね」

白石先輩は周りを見回しながら肩をすくめた。

「うちはね、下級生に天体観測の準備をさせることになってるんだ。けどどなにせ人手だけは豊富だから」

「はあ」

「各人が一年に一回だけ準備を手伝えば、それでみんな足りちまうのさ」

何だかよくわからない。帰宅部の僕たち全員に、一年に一回準備を手伝わせる。そんな事をする意味があるんだろうか。そんな僕の考えを見透かしたかのように、白石先輩が言葉を継いだ。

「うちの学校の部費配分システム、部員数が大きな比重を占めてるんだ」

「へ、へえ」

「ただし、『ちゃんと』活動してる部員だけが数えられる」

「はあ……あ、そうか」

僕はさつき兵庫先輩に半ば強引に名前を書かされたことを思い出した。あれで僕も正式な部員に数えられるんだろうか。

「まああの熱心さには恐れ入るよ。君も彼女に探し当てられたんだろっ?」

「まあ、そうですね」

「別に名前だけ書いちゃえばいいのにね。そんなインチキは許せないんだぞうだ」

「そうですね」

ちよつと手伝うだけで正規部員に、というのも少しインチキ臭い気がしたけど、言わないでおいた。

「それに、まあやはほんとにこの部が好きなのさ。だから、ほら」

白石先輩が突然振り返って兵庫先輩を指差した。思わず目で追うと、兵庫先輩がさつと僕たちから目をそらして空を見上げた。

「あ、あの星は……えーと」

「ふふつ、まあや。こっちに来るかい？」

「その呼び方、やめてって言うてるでしょっ！」

兵庫先輩は怒って僕たちとは反対方向へ歩いていってしまった。

「彼女、君が来てくれて、とても喜んでるよ。実際、すっぱかす奴も多いんだ」

「ま、まあ……そうですね」

僕はあの廃墟を望遠鏡で見てみたかったけれど、白石先輩には言えなかった。望遠鏡で地上を見るなんて、滑稽に感じたからだ。いや、

それだけじゃない。

「真っ暗だな……地上」

きつと何も見えないや。

その4

「ほら、きれいだろう。ここは空気が澄んでるからね」

白石先輩は星にとても詳しいらしく、僕に熱心に天空に輝く星座たちの説明をしてくれた。こんな状況、女の子ならウツトリして白石先輩の肩に思わずもたれかかるところだろう。僕は当然、そんな事はしない。

「もう少ししたら、流星群もやって来るんだ。すごいぞ……」

だけど僕は、別のことを考えていた。手元にある星座盤をじつと見つめながら、夕方の事を何度も何度も思い返してはため息をつく。

「ちょうど星座の位置する方向から降るから、その名が付くんだけ……」

白石先輩は僕の態度には気付いていないのか、夜空を見上げながら滔々と説明を続ける。僕はあいまいに相槌を打つのみ。

(僕、何かまずい事やったかなあ……)

ふわりと揺れるスカートに見とれてしまったのを気付かれたんだろうか。いや、名前を聞いたのがまずかったのか……。でもなあ、名前くらいで……。

「……さて、どうかな？」

白石先輩がひと通り説明を終えて僕の方を向いた。

「え、ええ……面白いです」

「そうか、ふふ、よかった」

白石先輩は満足したような笑顔で望遠鏡の方に向き直る。この人、ほんとにかっこいいな。

「じゃあ、難しい話はこれくらいにしようか。ただ楽しんでくれればいいんだ」

望遠鏡を覗くように促され、僕はレンズに目を近づけた。

「……わあ」

宝石箱をひっくり返したような溢れるばかりの輝きが、そこにはあった。

「星団だよ。実際に見ると、圧倒されるだろう」

「ええ、ほんとに」

さっきまでのわだかまりはどこかに吹き飛んでしまい、僕は熱心に眼前に広がる光の明滅を見つめた。

（
）

「また、来るわよね？」

兵庫先輩が帰り際に訊く。

「え、ええ、まあ、気が向いたら……」

「来るってことね!」

数冊の本とノートを整えながら、兵庫先輩は嬉しそうに叫んだ。

「いや……ええと」

「おいおい、まあや。あんまり強引に誘うなよ」

後ろから来た白石先輩が、僕の肩越しに兵庫先輩に言った。

「また! その呼び方!」

「あ、いけない。あはは、ごめんごめん」

「今度呼んだら、罰金もらうわよ!」

兵庫先輩は地面にしゃがみ込んで、道具を片付けている。

「でもまあ、兵庫部長じゃないけど、また来てくれたら、嬉しいよ」

白石先輩が僕の肩をポンと叩く。

「はあ……」

この天体観測は、僕にとってもそれなりに面白くはあった。ただ、再び来る気になるかといえは、それはちょっと怪しい。

「……悩んだら、星を見るのが一番の解決法さ」

白石先輩がぼつりと言った。

「え？」

「何か、悩んでるんだろう。ため息ばかりついてたよ」

何だ、ばれていたのか。

「星座盤を見ても元気にはならないけどね。ほら、見てみなよ」

腕を大きく広げた白石先輩につられて、僕は思わず空を見上げる。

「……………」

言葉を失う僕。星の大海だ。目が暗闇で慣れたせいか、無数の星がまるで僕にのしかかってくるかのように感じられる。ぼかんと口を開けたまま、しばらく動くこともできなかつた。

「やっぱり星は本物さ。心配なんて、ちっぼけに感じられるだろう？」

「はい」

「さあ、これからも僕と星空のランデブーを続けてみないか」

「……あんだ、最後のは余分よ」

下の方から声がして地上に目を移すと、兵庫先輩が振り返って僕た

ちを見ている。

「あ、いやあ、つい……いつものくせで」

頭をかきながら照れ笑いする白石先輩。兵庫先輩はヤレヤレという様子で僕に言った。

「白石、こうやっていつも女の子を勧誘してるのよ」

「あ、そうですね」

確かに、こんなに背の高くてかつこいい人に満天の星空の下で誘われたら、断れる女子生徒はまずいないだろう。こんな風に誘えるなんて、白石先輩がつくづくうらやましい。僕がやったら……どうだろうな。

「私は部員が増えるのはいいことだと思うけどね。ただ、あの子たち、星なんかちつとも見てないんだから」

「まあ、いいじゃないか。きっかけは人それぞれさ」

白石先輩が兵庫先輩をなだめる。

「部長が厳しく当たるから、誰も残らないのが難点かな」

「あんだ！　ここはデートする場所じゃないのよ！」

「わかった、わかったよ。悪かったよ、はは」

ほんとに元気な人だなあ、兵庫先輩。

「でも、絶対にモテるでしょうね、白石先輩って」

「ほんと、何でこんなふうになっちゃったのかしらねえ」

兵庫先輩がため息交じりに言う。どういふことだろう。

「先輩、彼女とかいるんですか？」

「僕かい？ いるよ。あそこにいるんだ」

白石先輩が空を指さした。空に？

「おとめ座。僕の彼女さ」

舞台役者のように大げさに言う先輩。

「は？ はあ……」

「真珠の異名を持つスピカ、淡く光を放つ大銀河団、見るものを虜にする暗黒帯のソンプレロ……」

先輩はうつとりとした表情で語り続ける。まるで詩でも読み上げて
いるかのようだ。

「ああ、この季節、君はなかなか姿を見せてくれないのだ」

「……………」

「それも、こいつの持ちネタなのよ」

兵庫先輩が冷酷に言い放った。

「男子にまで使うんじゃないわよ、白石ったら」

「何だよ、いい所だったのに」

白石先輩は素に戻って、兵庫先輩に笑いかけた。

「まあや、美しく輝く天空の乙女にも匹敵する女性は、地上では君ぐらいだよ」

「やめてよ！ その呼び方！ そのいう言い方も！ 罰金百億千万よ！」

兵庫先輩は手に持っていた分厚い本を振り上げて白石先輩に投げつけるしぐさをした。

「ははは！ 嫌うなよ！」

この二人。仲いいな。付き合ってるのかな……。

〃

「おいおい、どうしたどうした」

「なんだ、端島か」

「昨日ニヤついてたと思ったら、今日はため息かよ」

次の日になっても、廃墟での伊香保さんとのやりとりのことが気になっっていた。星空のもとで吹っ飛んだと思われた悩みは、太陽が昇るとまた僕の元に戻ってきたのだった。いくら空が雄大だといっても、僕はしょせん地上にへばりついて生きる平凡な一学生だ。

「はは〜ん、フラれたな」

「ふ、フラれてはいない！ まだ！」

「……………やっぱりそうか」

端島がニヤツと笑った。

「お前に好きな子ができた、って俺の勘は当たってたわけだ」

しまった！ 自分の間抜けさに腹が立つ。

「よし！ 相談に乗ってやる！」

こいつは何を言い出すんだ。モテなさ加減は僕もこいつも似たようなものだ。こんな端島がどうやったたら僕の恋の相談に乗れるのか。僕はうんざりしながらその申し出を断った。

「何だよ、せつかく人が心配してやってんのに」

お前の場合、ただの下衆心だ。

「まあ、押せよ。行くときは一気に、な。マシンガントークで口説き落とせ！」

端島は親指を立てて僕の前に突き付けた。こいつは知らないけれど、夕暮れ廃墟倶楽部では相互介入は禁止だ。少なくとも、彼女はそれを嫌っているように見えた。

「そんな子じゃないんだよ……」

ぼそっとつぶやく。

「ほう。じゃあ、あれだ。行動で示せよ！」

「行動？」

「カッコいいところを見せるんだよ！」

廃墟で僕の何を見せるというんだ。まったく、こいつとはとことん話がかみ合わない。

「わかった、わかったよ……ありがとな、アドバイス」

僕は端島を適当にあしらひ、机に突っ伏した。突っ伏しながら考える。今日、会えるだろうか……来てくれるだろうか……。

「またね」

あの子は昨日、帰り際にそう言った。来るさ。来たら、もうちょっとうまく会話できるように頑張ってみよう。よし、今度こそは。僕は不安と期待の入り混じる奇妙な気分で、授業もそっこのけに放課後になるのを待った。

その5

ところが、午後からだんだんと雲行きが怪しくなり、授業が全て終わるころには厚い黒雲が空をすっかり覆ってしまった。

「こりゃあ、いつ降り出してもおかしくないぞ」

端島が窓から顔を出し、空を見上げながら言った。

「早く帰ろっぜ、今ならまだ間に合うぞ」

手早く教科書やノートをカバンに詰め込んだ端島が、教室を出ながら僕に声をかける。僕は、悩んでいた。

「うん……いや、ちょっと用事があるから」

「急ぎなのか？ それは」

「ああ、まあな」

「そうか。俺はさっさと下校するわ。じゃあな」

「またな」

端島が帰ってしまった後も、僕は考えていた。今日みたいな天気の日、彼女は来るのだろうか。と。雨が降ってしまったら、廃墟を楽しむどころの騒ぎじゃない。いくらあの子が廃墟好きだからって、冷たい雨に打たれてまで行くほど魅力的のある場所だとはとても思えない。僕だってそんなのはまっぴらごめんだ。

「うーん、どうしよう……」

僕は自分の机がある場所から窓の向こうに広がる空を見た。だんだんと空が暗くなる。あれは間違いなく雨雲だ。ものすごい勢いで流れているところを見ると、どうやら風も強くなっているらしい。

「あー！ もうー！」

今日みたいな悶々とした気持ちのまま家に持って帰るのは、どうしても嫌だ。とりあえず行ってみよう。いなかったら、すぐに帰ればいいさ。僕は自分のカバンをつかむと、自転車置き場の方へと走った。

くく

「はあ、はあ……」

間に合った。まだ雨は降り出してはいない。僕は自転車を道路のわきに乗れり捨てると、ススキ野原を橋げたためがけて走って行った。すぐそばまで近寄ると、昨日よりも大きな声で呼びかける。

「伊香保さん、僕だよ」

返事は……ない。

「いないの？」

コンクリートの柱をぐるりと回ってみた。やっぱり誰もいない。今日は来ていないみたいだ。まあ……そりゃそうだ。こんな天気なら

ば当然だ。だいたい、あの子は毎日来るとは言わなかった。考えてみれば、毎日来れるような暇もないのかもしれない。

「ムダ足、か」

僕は橋げたを見つめた。ススキ野原は冷たい風に揺られ、さっきからざわざわと大きな音を立てている。どんどん暗くなっていく周囲の景色。空を見上げると、雲はさっきよりも厚く重なっているようだ。いつもとは違う顔を見せる廃墟。これはこれで、趣がある。夕暮れとは良い対比だな、と思った。

「……そうか、夕暮れだ」

彼女はいつも夕日を見つめていた。倶楽部の名前にすら入っている、夕暮れ。彼女はきつと夕暮れを見に来ているんだ。こんな天気の良い日には来るはずがない。どうして早く気付かなかったのか。

「何だよ……夕暮れがないと会えないのか」

僕は橋げたに向かい合って、手を這わせながらつぺんを見上げた。この古ぼけて使い道のなくなった柱が、今ではどこか空の一点を指し示すために存在しているように感じられる。この上、線路が残っているはずなんだ。航空写真で見たことがある。僕も登って行けるだろうか。高そうだなあ、きつと十メートル以上はあるに違いないでも、ところどころから飛び出ている鉄骨をつかんでいけば、もしかしたら……。

ぽつ、ぽつ

橋げたを見上げながらそんなことを考えていると、雨のしずくが僕

の顔に落ちてきた。僕はあわててススキ野原を抜けると、草の中に倒れている自転車を持ち上げ、すぐに飛び乗った。

「こりゃ、家に着くころにはずぶ濡れかなあ」

悪い予感がよく当たる。思った通り、自転車をこぎ出すとすぐに土砂降りが僕を襲った。

〃

あの日から毎日悪天候が続いている。今日でもう五日目だ。雨がやむことはあるけれど、厚く空を覆う雲が切れることは一度もない。僕は空を見つめながら、ため息をついた。

「どうした。まだ悩んでんのか」

端島が僕の背中をポンと叩く。

「悩み以前の問題だよ」

僕は小さくつぶやく。端島から「アドバイス」なるものを受けて以来、僕は伊香保さんに一度も会っていない。

「俺に何でも相談しろよ！ 助けてやれるかもしれないぞ！」

端島が陽気に笑う。

「じゃあ、この空、何とかしてくれよ」

「空っ、」

「雲を全部どけてくれ」

「は？ そりゃ無理だわ、俺でも」

分かっているさ。バカな事を言っていると自分で笑ってしまう。

「天気？ どうしたんだよ、天気を気にするなんて」

端島がそれを言い終わらないうちに、クラスの女子が僕に近寄ってきて声をかけた。

「ねえ、お客さん来てるわよ」

そう言いながら教室の扉の方を指さす。あれは……兵庫先輩か。

「おーい！ こっちこっち！」

兵庫先輩は手を振って僕を呼んでいる。恥ずかしいな、やめてくれよ……。

「はいはい……」

僕はそのそと自分のイスから立ち上がり、扉へと向かった。

「おいおい、ほうほうー！」

端島が好奇心たっぷりな目で僕を見送る。こいつには後で説明する必要があるだろう。どんな勘違いをされるか、わかったもんじゃなし。僕は廊下に出て、兵庫先輩に話しかけた。

「あの、何でしょう」

「今夜の天体観測だけどね、中止にするわ」

「ああ、天体観測ですか」

「この天気だもの。ちょっと、ね」

兵庫先輩が廊下の窓からちらりと空を見た。

「そうですね、晴れそうにないですね」

僕は天体観測の事をもうすっかり忘れていた。当然、今夜天体観測が予定されていたことも忘れていたし、それに参加するつもりだっ
てこれっぽっちもなかった。

「残念よねえ。せっかく新しい真部員が加わったのに」

「真部員？」

「真の部員、よ。活動に参加して初めて真の部員なんだから」

兵庫先輩は、人差し指を僕の胸に押し当てた。

「君は、私によって正式に真部員と認められた、ってわけ。どう？
嬉しい？」

「いや、どうと言われても……」

「あつ！ あと二人に伝えなきゃ！ じゃあね！」

兵庫先輩は時計を見ると、あわてて廊下を走って行ってしまった。

「騒がしい人だなあ……」

うんざりしながら教室の方に向き直ると。

「なーるほどな」

端島がニヤニヤした顔で僕のすぐ後ろに立っていた。

「わっ！ 背後霊みたいな真似するなよ！」

「天体観測、ねえ……お前が……それで天気を……そうかそうか」

端島は本当に嬉しそうな顔をしながら僕をじろじろ見ている。まったく、もう……。

「あのな……そういつ……」

「しかも、お相手は『地学部の金色彗星』、摩耶先輩じゃないか！」

「は？ 何だそれ？」

変なあだ名をつける奴もいるもんだ。そんな事よりも。

「お前、兵庫先輩の事知ってるのか？」

「有名だぞ。あの先輩、文化部連合では絶大な権力持ってるからな」

端島は腕組みをしながらしみじみという。僕にとってはすべて初耳だ。文化部が連合を作っていた事も、兵庫先輩が権力者だということも。

「あの先輩、何者なんだ？」

僕は端島に兵庫先輩について訊いてみることにした。

「何だ、知らずにアタックしてんのか？　しょうがない奴だな」

「アタックはしてないぞ！」

「まあまあ、いいから。摩耶先輩はだな……」

端島はコホンとひとつわざとらしい咳をして、話を続けた。

「総勢百人を超える巨大クラブ、地学部を率いる豪傑少女だ。部員が多いから、当然金も権力も彼女に集まる」

「……ふーん」

似たような話をこの前聞いたような気がするな。

「しかも抜群の政治力で、他の弱小クラブを次々と地学部に吸収合併させてるそうだ」

「……ほんとかよ」

「まあ、標的になるクラブは部員も少ないから、そこに属してた連

中からも文句はあまり出ないそう。ただ、そのクラブに行つて金を全部地学部がせしめるもんだから」

「敵も多そうだな」

「そうさ。睨まれてるぞ、あの人、かなり多方面から」

ただにぎやかなだけの人かと思つてたら。そんな人だったのか、兵庫先輩。

「あの人がそばを通ると、常に金の音がするそう。だから金色彗星」

「へえ」

僕がいつの間にかそんな邪悪なクラブの真部員になっていたという事実を思い返し、少し身震いした。

「お前、覚悟はできたか？」

「え？ 何のだよ？」

「摩耶先輩を支える覚悟だよ！ 大変だぞ！」

「いやいや、だから！」

きーんこーんかーんこーん

「おっと、やべ！ 課題やってねえぞ！」

端島は僕の話をおえぎって急いで自分の席に帰っていった。

「お、おい、ちょっと待てよー！」

「話はまたゆっくり聞いてやるからー！」

どうすんだよ、この勘違い……。

その6

授業中、端島はずっと寝ていた。いつもの事だ。僕はといえば、ずっと窓から見える空を見つめ続けていた。相変わらず空は真つ黒な雲に覆われているけれど、どうやら雨はやみそうだ。もし雨がやんだら、今日は橋げたに行ってみようか。こんな天気だし、彼女が来るとはとても思えない。それでも、彼女に会える可能性がほんの少しでもあるのならば、僕はその可能性を逃したくはない。

くく

「ふあゝあ」

端島が大きくあくびをしながら伸びをする。雨はやんでいた。

「さっ、帰るか」

おもむろにカバンを机の上に置くと、端島は教科書やノートをさっさと詰め込んでいく。僕は、授業中のよそ見のため先生の教科書の角で食らった痛烈な一発の痛みも忘れ、伊香保さんに何とか会えないだろうかと考え続けていた。

「なあ、帰るんだろ？ 摩耶先輩も地学部の活動は中止だって……」

「悪いな、ちょっと行く所があるから」

「お、おい！」

僕は端島よりも早く教室を飛び出すと、自転車置き場へと全速力で

走って行った。

「おい！ カバン忘れてるぞ！ どうしたんだよ！」

後ろの方で端島の叫ぶ声がした。

（（

普段全く運動をしない僕の体力では、どんなに全力で自転車をこいでもススキ野原にやって来るまでに十五分はかかる。僕は、その間に雨が降りほしないかと心配でたまらなかった。根拠はない。だけど、今日行けば彼女に会えるような、いや、会えないまでも何かが起こるような、そんな気がしていた。ただし、それも雨がやんでいくうちだけだ。雨が降ってきたら、伊香保さんには絶対に会えないと思った。

「はあ、はあ……伊香保さん！」

雲が早く流れていく。さつきよりも雲の層は薄くなったんじゃないか？ これなら太陽が少し顔をのぞかせるかもしれない。

「伊香保さん！ いるの？」

橋げたのふもとに着いた僕は、ありったけの声で彼女を呼んだ。しかし、返事はない。

「……やっぱり、いないか……」

僕は天を仰いだ。何というか、絶望的な気分だ。こうも会えない日が続くと、もしかして彼女は僕が作り出した幻だったんじゃないか

という気になってくる。情けなくて、おかしくもないのに笑ってしまふ。そんな間抜けな面で見上げていると、橋げたの上の方から、雨のしずくが鉄骨を伝って流れ落ち、僕の顔にピチャツとかかった。

「くそっ……」

無性に腹が立つ。全速力で自転車をこぎ続けた僕の足は、今でもがくがくと震えている。荒い息はちっとも収まらない。こんなことを一人で繰り返している僕自身に、腹が立って仕方がない。もしかしたら、彼女はこんな無様な僕を見て笑っているのか？僕はおちよくられたのか？何が倶楽部だ、バカじゃないのか？

「登ってやる！」

僕は確かにバカだった。僕に水をかけた鉄骨どもは、橋げたのコンクリート壁からところどころ顔を出し、僕に挑戦しているようにも見えた。興奮状態の僕には、それらを掴み、踏みつけ、上へと昇っていくことなど造作もない事のように思えたんだ。

「見てろ！見てろよ！」

僕はコンクリートブロックの上に登ると、橋げたの柱に向き合った。頭上には最初の獲物、細長い鉄骨が僕に掴んでみるとばかり挑発的に突き出ている。僕は思いつき息を吐くと右腕を大きく腕に伸ばし、その鉄骨を掴んだ。その瞬間。

「ばあか」

そう聞こえたような気がした。僕が掴んだ鉄骨はものすごい又メリをまとっていて、力強く握ったはずの僕の手をやんわりとふるい落

とす。それに全体重を乗せようとしていた僕はバランスを失い空中で仰向けになった。

「……あ、やば……」

コンクリートブロックに乗せていた足さえも雨のためにつるりと滑り、僕はあらぬ方向に投げ出された。待て、これはまずい、まずいぞ……。さっきまで血が上って煮えたぎっていた僕の頭はこの瞬間には血の気を失い、ゾワゾワとした悪寒を全身に引き起こしていた。

「……う、うの」

僕は必死にもがいた。滞空時間はものすごく長かったような気がするけれど、恐らく一瞬の出来事だったんだろう。どうもがいたのかわからない。ただ、頭から落ちる事だけは避けたかった。

どさーっ！

次の瞬間、ものすごい衝撃が僕の体を襲う。同時に、僕の左足に激痛が走った。

「い、いだっ……」

思わず苦痛に顔をゆがめる。両手で左足を抱えると、体全体にもう一度衝撃を受けた。

ずじゃーっ！

「……っ」

体が濡れていくのがわかる。僕はどうやらススキ野原で倒れているらしい。左足がカツカと熱い。少しでも動かそうとすると、ものすごい激痛が走る。抱えた両手をしばらく動かすこともできなかった。「くそ、くそ……」

情けなくて、泣けてくる。僕は一体何をやってるんだ。心落ち着かせ、静かな時を一人で過ごすはずの廃墟。そんな素晴らしかった場所。僕は足を怪我して泥だらけになってうめいている。誰も来ない。来るはずがない。彼女だって、絶対来やしない。

「何だよ、何だよこれ……うつつ」

ススキ野原がざわざわと音をたてはじめた。また風が出てきたのか。雨も降り出すんだろう。僕は動くこともできない。このまま、誰にも見つからずに……。

「……おい、おい！」

……誰だ……気のせいに決まってる。ちくしょう。

「しっかりしろよ！ ほら、がんばれ！」

……誰だよ……。

僕は気を失った。

くく

「兄ちゃん、ばっかじゃねえの」

気が付いたら、僕は病室にいた。トシの奴が僕の隣で笑いながら悪態をつく。その後ろでは親が僕を叱ったり慰めたりを繰り返していた。

「ほんと、兄ちゃんって間抜けだよな」

「お前、出てけ」

こいつは普段から口が悪いが、怪我人になった僕にも容赦はしなかった。トシはおちよくなるように僕の寝ているベッドの周りを回りながら悪口を言うと、満足した様子で親と一緒に帰っていった。一人になってから、自分の左足をそつと撫でてみる。大きなギブスか何か付いているかと思ったら、包帯が巻かれているだけだった。

どうやら、骨は折れていなかったようで、遅くとも二、三日後には退院できるという話だった。僕は安堵する。

それにしても。僕を病院まで運んでくれたのは一体誰だろう。気絶する前に、誰かの声を聞いた。どこかで聞いたような……。

「よっ、どうだ？」

「ああ、お前か。そうだ、お前だ」

翌日、端島がお見舞いに来てくれて、僕は声の主が誰だったのかを知った。

「ありがとな。お前だろ？　ここまで運んでくれたのは」

「ああ、まあな。半分はな」

「ほんと、感謝してる」

「まあ、いいじゃないか。そんなこと」

端島は僕の感謝にはまったく興味がなみたいだった。こいつは、こつこつ奴だ。それが僕にはとても嬉しかったし、申し訳なくもあった。

「それよりお前、何であんなところで怪我したんだ？」

端島が少し真剣な表情で僕に訊いた。僕はどう答えたらいいのかわからず、黙り込んだ。

「……いいけどな、別に」

「端島こそ、どうして僕があそこにいることがわかった？」

「いや、最初はお前を追いかけただけだよ。お前がカバン忘れて帰っちゃったから」

「……ああ」

「よっぽどだぞ。カバン忘れるなんて、ありえないだろ」

端島が苦笑する。無理もない。あの時の僕はどうかしていた。

「……僕、学校のそばで転んで怪我をしたことになってるな」

僕は、話題を変えた。

「ああ、そう言っただんだ」

「何でさ」

「だって、何かワケアリなんだろ？ あのススキの場所」

「……うん」

端島はきつと僕に気を利かせてくれたんだ。橋げたのそばで怪我したなんて言ったら、僕はもう二度とあの場所には行けなくなってしまう。僕があそこに固執していることに、奴は直感で気付いたのかもしれない。

「僕さ、お前には話そうかと思う」

「何をさ」

「……あのな……あっ」

「……どうした？」

「夕日じゃないか！」

「ああ、晴れたな、今日は」

端島と二人で窓の向こうの夕暮れを見つめていた。ああ、何てことだ。もしも今日あの場所に行けたなら、彼女はコンクリート壁にもたれかかりながら、その可愛い笑顔を僕に向けてくれたはずなんだ。きつとそうに違いない。僕は先走った自分が恨めしくて仕方がない。

「あの場所な、僕だけの場所だったんだ」

「……ん？ あ、ああ」

端島が不思議そうな様子で曖昧に返事をする。

「でも、ある人とそこで会えることになって……」

「それって、女の子か？」

「さすがに勘がいいな、端島は」

こいつは何もかもお見通しなのか。

「いや、勘じゃなくてさ。お前が怪我した日、あの野原の近くで会ったんだよ、俺も」

「……え？」

「何にもないところにいて、不思議な子だなんて思っただけだよ。お前がポロツちい柱に向かった、って教えてくれたのも、その子だよ。俺はただの通りすがりかと思ってただけ……」

「ど、どんな子だった！？ 特徴は！？ 格好は！？」

「え、何だよ！ 会ってたんじゃないのかよ！……そうだな、何か古臭い制服を着て、物静かっというか、クールっというか……」

間違いない。あの近くで僕を知り、そんな不思議な雰囲気を感じた女の子。伊香保さんだ。僕は確信した。

その7

動揺を隠しきれない僕を見て、端島がなだめるように言った。

「どんな関係の子か知らんが、あんまり無茶するなよ。怪我なんかしやがって」

僕は伊香保さんがいつあの場所にやってきて、何をして、何を見たのかが気になってたまらない。端島は何かを知っているだろうか。こいつは彼女と話をしたんだ。きつとこいつから彼女の聞けるに違いない。くそっ、それにしてもうらやましい奴め！

「おい、端島！」

「な、何だよ！　びっくりした、突然大声出すなよ」

「その子、どっちから来た？　どんな様子だった？」

僕は矢継ぎ早に質問を投げかける。体をどんどん乗り出して、ベッドから落ちそうになっているのにも気づかずに。端島は僕の両肩に手を乗せて、ほんの少し押し返した。

「まあ、まあ、落ち着けて。あの子なあ……俺もあんまり気にしてなかったから、どっちから来たかよくわかんないな。いや、突っ立ってたような……」

「そ、それで！」

「ええと……うーん、普通だったなあ……普通っていうか無愛想っ

ていうか」

「僕が怪我したってこと、知ってたか？」

「いや、どうだろうな。焦ってるようには見えなかったけどな。いや、でもあつという間にいなくなったよなあ。走って帰ったのかな」

端島からの情報を総合しても、僕が知っている伊香保さん以上の振舞いは全く出てこない。結局、彼女はあの時何をしていたんだ？

「なあ！ 何でそこにいたのが、訊かなかったのかよ？」

僕はだんだんイラついてきて端島にさらに質問を投げかけた。

「訊くわけないだろ！ 全然知らない人間にそんな事訊けるかよ！」

端島ももううんざりしたような顔をしている。こいつは何も悪くないんだ、いや、むしろ命の恩人だ。大げさかもしれないけれど、こいつがいなかったら僕はいろいろな意味で絶望に飲み込まれていたんだ。感謝すべきなのに、鬱積した思いをぶつけてしまった事を僕は恥じた。

「……まずはしっかり治せ。治ったら俺も協力するからさ」

端島は僕よりもずっと大人だと感じた。僕の焦りや憤りを全てお見通しなのかもしれない。そのまま僕に背中を向けると、右手を上げて手を振った。

「じゃあな、学校でまた、な」

「ああ……ありがとうな」

端島はそのまま病室を出ていった。あとに残った僕は沈みゆく夕日を見ながら橋げたの風景を思っていた。今日は伊香保さんは来ているだろうか。夕日のきれいなあの場所に。集うことのできない僕に失望してはいないだろうか。もう倶楽部を解散してしまおうなんて考えているんじゃないか。そしたら、もう二度と彼女には会えないのか。そんなの嫌だ。ベッドにもぐりこんでいると、悲観的な思いばかりが膨らんでくる。

「早く治れよ、脚のやつ」

〃

退院しても支障なく歩けるというわけじゃない。自転車はしばらく乗れないし、一本とはいえ松葉づえの世話になる必要もあった。もっとも、つえが本当に必要だとは思えない。僕はゆっくりとならもう普段と同じように歩けるんだ。松葉づえは保険のようなものに過ぎない。

それでも、つえについて再び登校する僕は衆目の的となり、ある連中は同情の目を、そして他の連中は侮蔑の目を僕に向けるのだった。

「端島が本当の事隠してくれて、本当に良かった」

僕はほっと胸をなでおろした。廃墟で怪我なんて、格好悪いなんて以前の問題だ。当然好奇の目にさらされたに違いない。

「やつ、災難だったわね」

後ろから元気のいい声がした。

「は、はあ。まったくです」

僕は振り返る。兵庫先輩は以前と変わらず僕に屈託のない笑顔を見せてくれていた。

「どう？ まだ痛むの？」

「いえ、そんなには……もうほとんど治っているんですが」

「そう、よかつたわ。でも無理はダメよ。完全に治るまで、活動を休んでてもいいわ」

「はあ……」

活動というのは、兵庫先輩が部長を務める地学部の天体観測の事だろう。僕は一度しか行った事がない。それも兵庫先輩に無理やり引っ張られて行ったたようなものだ。休むも何も、活動に参加するなんてひと言も言っていない気がするけど。

「じゃあねー！」

兵庫先輩は元気に校門の方に走って行った。相変わらず元気な人だ。あんな人が、本当に部費を強欲にせしめているんだろうか……。

（ ）

「よう、復活だな」

端島が僕の席に寄ってきた。

「ああ、あの時はほんとありがとな」

「ああ、いいさいいさ。それよりもさ」

端島がニタリと笑いながらさらに顔を近づける。

「いいのかよ、もう浮気か？」

「は？」

何を言っているのかさっぱりわからない。端島は薄気味悪い笑みを保ったまま、声をひそめて言った。

「金色彗星と野原の子と、迷ってる。そうだろ？」

金色彗星？ ああ、兵庫先輩か。……って、おいおい！

「まだ兵庫先輩の話を引きっぱってんのかよ！」

「だってさ、お前、すごく親しそうじゃなかよ、金色彗星と。今朝も見たぞ。お前が仲よさそうに話してんの」

「……はあ」

僕はため息をついた。伊香保さんの事であれだけ必死になっている僕を見ていながら、なぜそこで兵庫先輩が出てくるんだ？ こいつは鋭いのか鈍いのか、ちっともわかりやしない。

「……兵庫先輩の事は全く関係ない。いいな。忘れろ」

「ほう？　じゃあ野原の子にしばるのか」

そもそも兵庫先輩が気になった事なんか一度もないが、まあいい。端島には僕が伊香保さんを気になっているという事がばれてしまったが、こいつも彼女に会っているんだし、いつまでも隠していても仕方がない。間違いなく一方的な想いだろうけれど、それでもいいんだ。僕は一つの決意をしていた。

「あの場所に行かなきゃ……」

そうつぶやきながら、僕は窓の外を見た。さわやかな青空が広がっていた。

くく

放課後、どうやら僕は思いつめた顔をしていたらしく、端島が心配そうに僕に話しかけた。

「おい、行くのか？」

「ああ、行く」

「今日はやめとけよ、あんまり無理するとまた怪我するぞ」

「……一刻も早く会いたい」

「……………」

僕の覚悟を見て取ったのか、端島はしばらく腕組みして考えた後、

決心したように言った。

「よし！ 俺が連れてってやる！ お前のその脚じゃ自転車で行けんだろうしな」

「お前が？ あそこに？」

「気にすんな！ 子守りだと思ってくれりゃいいんだよ！」

子守り……って……。だけど、こいつに一度あの場所で助けられている以上、僕は何も反論することはできない。それに、こいつはこいつで、僕の事を心配してくれているんだとわかる。こいつはそういう奴だ。

「そのかわりさ、ちょっとでいいからあの子の事、教えてくれよ」

「伊香保さんの事……そうだな……」

僕は、入院していた時から、いつか夕暮れ廃墟倶楽部の事を端島に話すつもりでいた。だけど、今、まさに話そうとしていた時に、あの重大な事に気付く。そういえば、あの場所は僕と伊香保さんだけの秘密だったんだ。そう言い出したのは僕自身だ。なのに今、僕はそれを自分から破ろうとしている。どうしたらいいんだ。

「おい、どうしたんだよ」

端島がいぶかしげな顔をしている。僕は悩んだ。こいつに洗いざらい話してしまってもいいものか。話してしまつたら、伊香保さんは怒って来なくなってしまうだろうか。端島は廃墟が好きな性格にはどうしても見えない。そんな人間に話してしまうのは……うーん。

「ええい、もう！ 彼女に訊け！」

僕は端島に橋げたまで付いてきてもらうことにした。こいつはすでに僕を助けるために一度あの場所に行っている。その事は伊香保さんも知ってるんだ。何より、端島に僕に居場所を教えたのは伊香保さん自身だ。それはつまり、端島はすでに両者共に認める倶楽部の関係者だって事じゃないか？

僕の先走った考えかもしれない。ただ、それを確認するためにも、もう一度こいつを伊香保さんに会わせたい。彼女との事に関してもうすっかり自信を失くしてしまっていた僕には、この心強い友人、端島の力を少しでも借りたいという下心もあつたに違いない。

「そうか。よし、決まりだな。俺は自転車取ってくるから、校門で待ってるよ。後ろに乗つけてやるから」

下駄箱置場からゆっくりと校舎を出た後、僕は日が傾き始めた空を見ながら校門に向かって歩いていった。今日はきれいな夕暮れが見られそうだ。だけど、彼女は来ているだろうか？

その8

「よっ、待たせたな」

端島が自転車に乗って勢いよく校門まで走ってきた。今からこいつの自転車に乗って僕はススキ野原に行く。そして運が良ければあの子に会えるはずだ。短い時間しか一緒に過ごしていないのに、すでに僕の中で大きな存在になっているあの子に。あの子ともう一度、二人つきりで夕日を見ながら話したい。内容なんかどうでもいい、ただ声が聞きたい。一面のススキ野原をさわやかに駆け抜ける風のような、あの澄み渡った声を。

「どうした、早く乗れよ」

想像とは裏腹の濁った声に引き戻され、僕は我に返る。あわてて松葉づえを抱え、そのまま端島の自転車の荷台に腰を下ろした。

「よし、じゃあ行くか」

端島がゆっくりと自転車をこぎ出した。僕はなるべく自分の体を端島の背中から離すように胸を反らせる。男にしがみつくのは気持ち悪いし、何よりも、あの子を想ってすでに豪快に脈打っていた心臓の音を聞かれたくなかったから。そんな不自然な格好をしていたせいで、僕は何度も自転車から転げ落ちそうになった。

「お、おい！　しっかりつかまってるよ！」

端島が自転車をフラフラさせながら僕に叫んだ。

〃

端島が何かを話しかけていたような気がするけれど、僕はまるで覚えていない。何を言われても生返事をするばかりだったように思う。そのせいか、端島は途中で黙り込んでしまった。そうこうしているうちに、高速道路の下を潜り抜け、車の全く通らない真新しい道路に出る。ここをまっすぐ行けば、もう橋げたはすぐそばだ。僕は道路のわきに広がるススキ野原を見つめていた。

「ほんつと、何も無いよなあ、ここ」

端島がつぶやく。

「あるさ……橋げたが」

僕もつぶやき返す。

「あそこに見えてる柱だろ。何ていうか、神秘的だよな。一本だけ残って」

僕も最初は同じことを思ったさ。子供の頃、僕は親に内緒で遠出をして、高速道路下の暗いトンネルを抜け、ここにやってきた。目の前に広がっていたのは、無限の広さを持つと思われた一面の銀色のススキ野原。その真ん中にまるで巨大な石像のようにそびえ立つ橋げたを見つけた時の感動は、今でも鮮明に思い出することができる。その時以来、あの橋げたは僕にとって特別な場所になっていた。最初は友達も呼んで一緒に来ていたんだ。一種の秘密基地みたいなものだった。けれど僕らが大きくなるにしたがって誰もこの事を思い出さなくなり、今では僕一人だけの秘密の場所になっている。いや、正確には僕と伊香保さん、それから……。

「あの子に会えるといいな、お前」

もう一人、端島も、かなあ……？

「よしっ、着いたぞ。降りろよ、ここからは歩きだ」

ススキ野原の脇に自転車を止め、僕と端島は橋げたに向かって歩き出した。たくさんのススキをかき分けて、目標めがけて一心に歩く。走ることができない自分の足がもどかしい。ああ、いてくれ、いてくれ、伊香保さん……。僕の胸の鼓動がどんどん速くなる。疲れてもいないのに息がどんどん上がってくる。もう足の痛みなんかまったく気にならない。僕の目にはあの橋げたしか映らない。無我夢中で進み続け、ついに橋げたにまでたどり着いた。

「い、伊香保さん……伊香保さん！ 僕だよ！」

自分でもびっくりするぐらいの大声だった。変に声が上がって、自分自身がとても滑稽に思えたけれど、僕はそれだけ必死だったんだ。

「ちよ……ビツクリすんだろ……急に大声出すなよ、ったく」

端島が呆れたような口調で何かを言っていたが、僕にはまったく聞こえない。僕は返事を待った。

「裏に回れよ……何突っ立ってんだよ」

僕はその場で待ち続けた。そして。

「ぶぶっ」

さわやかなそよ風のような透明な笑い声が、確かに聞こえた。僕は絶対に聞き逃さない。

「僕だよ！ ひ、久しぶり！」

「ほんと、久しぶり、かしら」

彼女が橋げたの陰から顔を出した。まるで僕が彼女に初めて会った時のように、彼女は僕に微笑みながら手を小さく振っている。それを見て僕は思わず顔がほころんでしまう。もうどうしようもなく嬉しくて、興奮のあまり自分が手を振り返している事にも気付かなかった。

「どうしたの？ しばらく来なかったみたいね」

彼女が無邪気に訊く。

「う、うん……足がね……それで、こいつが……」

「うん？」

「こいつが……足で……自転車が……それから……」

もう舌が回らない。思考が追い付かない。彼女は相変わらず微笑んだまま、不思議そうに首を少しだけかしげた。そんな天使のようなしぐさで、僕の目をまっすぐ見つめている。ああ、彼女が可愛すぎて僕の頭は爆発しそうだ！

「ほら、こいつがここで怪我したのを、俺が病院に連れてってさ。

そのまま入院しちゃったもんだから、しばらくここには来れなかった、ってこと」

端島が僕の代わりに事の成り行きを説明した。

「どこで？ そうなの？」

伊香保さんは僕の足を見ながら心配そうに言った。

「いやいや！ もう大丈夫だから！ほんと、もう大丈夫！」

ここが危険な場所だと思われたくない。それに、僕たちの安らぎの場所で怪我をしたなんて、格好悪くて仕方がない。僕は伊香保さんに、これは大した怪我じゃないと必死にアピールした。

「でも、助かったよ。君がさ、ええと……」

「伊香保榛奈」

「ああ、伊香保さんに教えてもらったから、こいつも命拾いしてさ」

「そんな大げさな事じゃなかっただろ！」

「私？」

「あれ？ ええと……おつかしいな……」

「も、もういいだろ！ この話は……」

「ん？ あ、ああ。まあいつか」

「でも、気を付けてね」

伊香保さんの気遣いの言葉で僕は天にも昇る気持ちになる。そのま
まいい雰囲気話せるんじゃないか、そんな事を期待していた矢先、
端島が横から口を出した。

「それでさ、伊香保さんはここで何してんの？」

「榛奈でいいわ、くすっ」

「そうか？　じゃあ、榛奈ちゃんは……ああ、俺は端島って言うん
だけど……」

「端島君、ね。私はね、ここが好きなの」

「へえ、ここがねえ……」

何だこれ、何なんだ。伊香保さんが端島と楽しそうに会話している。
あいつは僕より先に馴れ馴れしく彼女の名前を呼びやがった！　何
て腹立たしい！　彼女に用があるのは僕の方だぞ！　彼女だって、
僕に……僕に……。

「あ、あの……僕も名前で……呼んでいいかな……」

楽しげな会話を続ける二人に向かって、僕は唐突に叫んだ。そして
叫んだ後で後悔する。こんな話しかけ方って、あるか！　僕は間違
いなく混乱しているに違いない。自分で分かっていたけれど、もう
止まらない。とにかく彼女の注意を僕に引き寄せたい、僕はそれだ
けを願っていた。

「ほら、名前……伊香保さんじゃなくて……は、は……」

「うん、いいよ。榛奈でいい。ふふっ」

「突然何言うかと思ったら、何だそれ」

端島は黙っていてほしい。できればここにいる間はずっと、永久に。僕は心の底からそう思った。

「……榛奈さん。あの……こんにちは」

「こんにちはっ。あははっ」

榛奈さんが笑った。僕に笑ったぞ。端島にじゃない。間違いなく僕に笑っている。全身がとろけていくような気分になる。彼女はそんな笑顔のまま、夕日の方に向き直った。

「夕日が、好きなの。ここで見る夕日」

「う、うん。きれいだ。本当に」

僕が美しいと感じているものは、もちろん夕日だけじゃない。いや、夕日以上には今は榛奈さんがずっとずっと輝いて見える。その笑顔を見るためだったら、僕はどんな苦勞をも惜しまないだろう。この橋げたを登って行くことさえも。

「そっぴや、ここは何もないから空がよく見えるな」

端島が納得したように言った。僕たち三人はそのまま黙って夕日を

見つめた。いや、僕は榛奈さんの顔をちらちらと盗み見していたけれど。赤く染まった彼女の肌は相変わらずガラス細工のようだった。

「さて、と。私、もう行くわ」

しばらくして榛奈さんが口を開いた。

「ま、まだ早いんじゃないかな。もうちょっと……」

僕は焦って彼女を引き止めようとしたけれど、彼女は静かに首を横に振った。

「……またね」

彼女がつぶやくように言った。それを聞いて落胆する僕を見て気を利かせたのか、端島が榛奈さんに呼びかけた。

「ねえ。こいつ、君がまた来るか気になってるってさ。来るんだろ？」

「ええ……端島君も、でしょ？」

予想外の返事を聞いた僕と端島は、思わず顔を見合わせた。端島も？

「だって、部長さんの推薦だものね。私たちの夕暮れ廃墟倶楽部へ、ようこそ」

そう言うと榛奈さんは背中を向けてススキ野原を道路めがけて走り出した。

「あ！ ちょっと！」

僕と端島が同じセリフを同時に言った。彼女はそのまま軽やかに走って行くと、一度振り返って僕たちに手を振った。僕たちも手を振り返すと、彼女は満足したように道路を横切り、高速道路の方に向かって行ってしまった。

「何とか倶楽部……って、何だ？」

しばらくして、端島が僕に訊いた。

「二人の秘密……だった……今日までは」

僕は苦々しくそう答えるのが精いっぱいだった。

その9

帰り道も僕はずっと不機嫌だった。榛奈さんとろくに話もできなかつたばかりか、彼女は関係なかつたはずの端島を気に入ってしまったようで、僕にはどうにも納得がいかなかった。

「いやあ、可愛い子だったな、榛奈ちゃんって」

僕は、端島の自転車の後ろに座りながら黙りこくっていた。これは間違いなく嫉妬に違いない。今日、彼女が他の男と喋るのを見て僕ははつきり確信した。僕は彼女が好きなのだ。

「見慣れない制服着てたけど、どこだろうな。お前、知ってんのか？」

そんな事に全く気付いていない様子の端島は、能天気な僕に語りかけ続けた。こいつに悪気がないのはよくわかってる。何より僕は彼女と端島が会うように仕向けた張本人だ。少しぐらい二人が仲良くなつたからって、僕がそれに腹を立てるのは端島にとっても理不尽極まりない事のように思える。ただ、僕は彼女が最後に残した一言がいつまでも心の中で引っかかっていた。

「私たちの夕暮れ廃墟倶楽部へ、ようこそ」

これはどう考えても端島を倶楽部のメンバーとして認めるという宣誓だ。二人だけの甘美なる秘密とたかをくくっていた僕、そんな存在だつたはずの倶楽部は、彼女の放つた一言により、いとも簡単にそのベールが剥げ落ちてしまった。

「おい、どうしたんだよ、黙っちゃって」

端島には倶楽部に入る資格があるのかどうか、確認しておく必要があると思った。僕たちの倶楽部のメンバーは、少なくとも廃墟を愛していなければならぬ。そして、夕暮れを愛でる耽美心を備えている事が望まれる。鈍感でガサツな端島には、そんなものが微塵も感じられないが。

「それよりも、あの場所はとうだった？」

「ああ、野原な。寂れたうちの街の中でも特に寂れてる場所だな」

「お前は、あの場所、気に入ったのか？」

「うーん、結構面白い場所だとは思ってたな。変な柱があるし」

「……面白って、どんな風にだよ」

「え？ お前が思ってるのとおんなじような感じじゃねえの？ たぶん」

「お、お前と一緒にするなよ」

「そうか？ 俺もまたあそこに行ってみたいと思っぜ。あの子もそう言っただしな！」

端島は話をはぐらかす天才だと思っ事があるが、今回もこいつはその才能を如何なく発揮して、結局僕にはこいつの廃墟観がさっぱりわからなかった。ただ、間違いなく言える事は、端島が僕の強力なライバルになる恐れがある、という事だ。こんな、女の子目

的でホイホイと僕たちの崇高な廃墟に来るような奴に、倶楽部を汚して欲しくない。汚れた心の持ち主は、あの場所に足を踏み入れるべきじゃないんだ！

「お前もあの子に会いたいんだろ？ また行こうぜ！」

「僕？ 僕は……」

そつだ。僕はハツとした。こいつに言われて、最近の僕が榛奈さん目的である場所に行っている、という事に気付いたんだ。ならば僕もこいつと変わらない、ただの軟派な、どこにでもいそうな普通の青少年じゃないか。僕は今まで、自分が孤高で、ある種浮世離れしていて、それでいて大人びた、平凡な学生には到達できない人間であるとしそかに自惚れていたのだ。そんな僕の価値を知り、共感し、時間も気持ちも共有してくれた可愛い榛奈さん。いつしか僕はそんな彼女に認められるほどの特異さを失ってしまった、スケベ心丸出しな下衆男に成り下がってしまったんじゃないだろうか。それを考えた時、僕は僕自身に非常にガツカリした。だってそうってしまったら、僕だって倶楽部にいる資格がないような気がしてしまったから。

「だけど、変な子だよなあ。言動がさ。人を食った性格っていうか……いきなり訳分からん事言っただけで帰っちゃうし……何だっけ、廃墟倶楽部とか」

彼女はいつも突然帰ってしまう。僕にそれを止める権利はない。ただ、彼女が人を食ったような性格だという意見に関しては、僕も端島に同意だ。現にこうして僕は彼女の言動に振り回されっぱなしで、それは未だに続いている。今にして思えば、彼女は僕の下心を見抜いていたのかもしれない。だから僕と過度に仲良くなるのを避けて

いたに違いない。それは、廃墟の崇高さを保つためには必要な事なんだ。そうだ、僕は彼女を同志と認めたんじゃなかったか。同じ廃墟と風景を愛する仲間として。僕は原点に立ち返る必要がある。

「なあ、そろそろちゃんと教えてくれよ、その倶楽部の事」

頭では分かっているんだ。彼女が言う「お互いに邪魔をしない」の意味はこういう事だ。つまり、夕暮れと廃墟を愛し、それらのみを大事にする。ただ……彼女の魅力に抗えない僕もここに存在する。今日だって、もし彼女に出会っていなかったら、怪我を押しして廃墟に行こうなんて考えただろうか。いや、彼女にこれ以上嫌われないために、僕は下心を消し去る必要がある。……ん？ 矛盾したことを言っていないか？

「……あくまで秘密なのか？ 黙っちゃってさ」

僕の頭は激しく混乱していた。くそっ、何でこんな事になっちゃったんだ！ そうだ、端島だ。こいつが榛奈さんと仲良くしているから、僕は自分を見失っているんだ！ だけど、もし僕の考えが正しいなら、榛奈さんは僕だけじゃなく端島にも関心が無いはずだ。じゃあ、どうして僕たちの倶楽部にこいつを引き入れようとなんかしたんだろう。

「おい、端島」

僕は思わず呼びかけてしまった。

「何だ？ ようやくしゃべりだしたか」

「お前、あの子を好きになっただか？」

「は？ どういう意味だよ」

「だから、惚れたってどうか……」

「……プッ」

僕は真剣そのもだった。なのに端島は突然吹き出す。

「はははっ！ ないわ！」

端島の答えは僕を唾然とさせた。勝手にこいつをライバルだと勘違いしていた僕を。

「俺、ああいう不思議系の子はダメなんだわ！ まあ、すごく可愛
いけどな！」

「そ、そうか……」

端島の性格にはあんな繊細な子は似合わない。そりゃそうだ。僕は
自分がとても安堵している事に気付いた。

「それに、俺はお前が狙ってる子なんか取らねえよ！」

端島が肘で僕を小突いた。僕は顔が真っ赤になるのを感じた。いや、
それはともかく、榛奈さんが端島を引き入れようとした理由も少し
だが分かった気がする。こいつには下心が存在しないからだ。端島
が廃墟好きにはとても見えないけれど、これから彼女がその魅力を
教えようとしているのかもしれない。

「言っただろ、協力してやるって。ちょっと難しそうな子だけだな」
僕のヤキモキした心に全く気付いていなかったくせに、端島は偉そうに僕に協力を申し出る。そう思うならもうちょっと気を使ってくれ！

「……とりあえず焦らないことにする」

「ふーん、わかったよ」

さんざん考えた挙句、僕が出した答えは、「現状維持」だった。

〃

「ねえ、お客さんよ。また同じ先輩よ」

同じクラスの女子が僕の机にやってきて僕に言った。

「ああ、兵庫先輩か……」

僕はつぶやきながらノロノロと立ち上がる。また地学部に来いとか言うんだろつ。

「きれいな先輩と付き合うのはいいけど、あんまり入り口でイチヤイチャしないでよね。邪魔なんだから」

女子が何やら文句を言う。何でそういう勘違いができるのか僕にはさっぱりわからない。

「付き合ってもないし、イチヤイチャもしてないし、端島と同じよ

うな事言つなよ」

吐き捨てながら教室の扉に向かう。こここのところ毎日のように兵庫先輩は僕の教室にやって来る。よっぽどいいカモにされたんだろう。それにしても、初対面の時も薄々は感じていたけど、兵庫先輩って同性から見てもきれいなのか、やっぱり。

「やつ！ もう足もすっかり治ったんでしょ！ そろそろ来なさいよ！」

兵庫先輩は相変わらず元気いっぱい僕に笑いかけた。

「いえ、だって天体観測は週一回でしょ」

僕が面倒くさそうに答えると、兵庫先輩はヤレヤレといった表情で僕に言った。

「何言ってるの。地学部の活動は天体観測だけじゃないのよ」

「へえ……」

とにかく僕には興味のない事だ。断ろうとしていたその時、後ろで声がした。

「よう、何してんだ？……あ、金色……」

端島は兵庫先輩には気付いていなかったようで、その姿を見つめるや否や、思わず先輩のあだ名を声に出しそうになって、あわてて口を閉じた。このあだ名、やっぱり先輩の前では禁句なんだな……。

「ふふん、とにかく、活動に参加してね！ 君はホープなんだから！」

兵庫先輩が無邪気に言う。いやいや、勝手にそんな。

「ほう、よかったじゃんかよ！」

端島まで同意する始末だ。うんざりする僕を横目に見ながら、今度は先輩は端島の方に向き直った。

「君もよ、今週の天体観測！」

「……は？」

端島がきょとんとする。僕だって同じだ。

「君が当番！ 端島軍平君！」

「あの……何の……」

「地学部員でしょ！ ちゃあんと部員名簿に載ってるんだから！」

「……へ？」

その10

放課後、僕と端島はとりあえず地学部に行ってみることにした。というよりも、端島に地学準備室の場所を教えるのが主な目的だった。呆れたことに、こいつは部屋の場所を知らなかった。

「俺……地学部だっけ？」

端島は今でも半信半疑な顔をしているが、僕ははつきり思い出していた。間違いない、こいつは地学部員だ。何せ僕が地学部員なのはこいつのせいなのだ。

それは僕たちがこの学校に入学した頃に遡る。

くく

どの部活にも何の魅力も感じていなかった僕は、適当にサボれる部活を探していた。部活動参加が必須のこの学校では、どこかに籍を置いていなくてはならない。自分の机で入部希望届とにらめっこしていた僕に近づいてきたのが、こいつ、端島だった。

「おい、どの部に入るか決めたのか？」

端島は最初から馴れ馴れしい奴だった。戸惑いながらも僕が正直に自分の気持ちを言うと、端島はニヤツと笑いながら答えた。

「はは、俺もさ。部活なんかメンドクセエし、適当に書きゃいいんだよ」

「でも、出席に厳しい部活だと困るしなあ」

「いい部があるぜ。そこは行かなくても全然問題ない」

「え？ どこ？」

「それはな……」

〃

「地学部……か。俺、そんなとこに名前書いたかなあ？」

当の端島は何も覚えていないようだ。恐らくこいつが教えてくれた幽霊部情報も、誰かからの受け売りだったんだろう。だけど、僕も人の事は言えない。僕だって、兵庫先輩に呼ばれるまでは、そんな事すっかり忘れていたのだから。

「せんぱーい、失礼しまーす」

地学準備室に着くと、端島が閉じられたドアの前で声を張り上げた。部屋の中から何やら音がする。

「よし、じゃあ入るか」

端島は何のためらいもなくドアを開けた。中は真っ暗だった。

「ちよつとー！」

すぐに暗闇の中から声がする。声の主は兵庫先輩のようだった。

「明るくしないでよ！ 活動の最中なんだから！」

何をしているのか最初はよくわからなかったが、どうやら室内プラネタリウムで星の動きを見ていたらしい。部屋の中には他にも何人かいる気配がした。

「いやあ、今日の当番っていうもんだから、ちょっと確認しとこうかと思ひまして」

端島は悪びれる様子もなく兵庫先輩に言った。先輩は小さなため息を漏らすと、僕たちに部屋の中に入るように指示する。

「あ、ちゃんとドアは閉めてね」

部屋中暗幕が張り巡らされ、ドアを閉めると途端に暗闇が僕たちを覆った。

「天体観測はもつと後。今はその予習してるんだから。君たちも付き合いなさい」

まいったな、と僕は思った。僕は天体観測に行くつもりもなければ、ここでこうして活動に参加するつもりもなかった。端島を連れて来ただけなのに、このままじゃ夕暮れに廃墟に向かうことができなくなる。厄介な事になった、と僕がしかめっ面になった時。

「あ、先輩。こいつは今日早く帰らないといけないんですよ」

真っ暗闇でそんな僕の困り顔を見たはずもないのに、端島はとっさに僕に気を利かせてくれたようだった。こういう時はいつも頼りになる奴だ。

「え？ 何だよ。天体観測もあるのよ、今日は」

「え、ええと……足の検査をしないといけないんだよ、な？ そうだろ？」

「う、うん。そうなんです。だから今日はちょっと……」

「……ほんとかしら？」

何も見えないけれど、兵庫先輩の疑いの視線が体に突き刺さっているのが痛いほど分かった。すると。

「病院じゃあ仕方ないじゃないか。怪我はちゃんと治さないとけないしね」

部屋の奥の方で爽やかな男の声がした。あれは、白石先輩だな。

「すみません……参加はまた今度という事で……」

僕がじりじり後ずさりしながら扉に近づいていくと、兵庫先輩が言った。

「わかったわ。お大事にね。でも、治ったらちゃんと来るのよ。いい？」

「ええ、まあ気が向いたら」

「もっつ！ そんなやる気のない態度じゃだめよっ！」

「はは、またおいで。幽霊君」

兵庫先輩と白石先輩の声に見送られ、僕は静かに地学準備室を後にした。端島の奴には借りができた。だけど、あれほど部活動に無関心だった端島が、どうして今頃地学部なんかに行く気になったんだろう。少し不思議に思いながらも、僕は自転車置き場に向かった。

）
）

端島と僕が橋げたの下で榛奈さんに出会って以来、僕は毎日のようにススキ野原へ通っていた。榛奈さんはあの時からずっと橋げたに集ってくれている。端島は、最初の日に来ただけで、最近は全く来る気配がない。何でも、僕と彼女との時間を邪魔したくはないんだそう。僕は最近奴には感謝しきりだ。そんなわけで、僕の心には若干の余裕が生まれていたのだった。

「やあ、こんにちは」

「こんにちは」

榛奈さんは橋げたにもたれかかって空を見上げていた。もうすっかり見慣れた風景。地平線もススキ野原も橋げたも夕日も、まるで彼女を引き立てるための舞台セットのように思える。

「今日はね、端島を部活に連れて行ったんだ」

早速榛奈さんに話しかける。最近気付いた事だけど、榛奈さんは僕が廃墟で腰を落ち着けるまでは雑談に付き合ってくれる。僕が一息ついて空を見上げた時、そこから二人に相互不干渉ルールが適應されるようだった。そんなわけで、その短い時間の中で何を喋るべき

かをススキ野原に着くまでに必死に考えるのが、最近の僕の習慣になっていた。

「そう……どんな部活？」

今日も彼女は僕の話に乗ってくれた。

「うん、僕も端島も、地学部なんだ」

「地学？」

榛奈さんが不思議そうな顔をした。もっともかもしれない。

「地学って名前だけど、空も見るんだ。今夜は天体観測の日で、あいつがその準備をすることになってるから、部室に連れて行っただよ」

「へえ……天体観測かあ……いいね」

榛奈さんは空を見上げてしみじみと言った。

「そうだね……僕も一回行っただけど、よかったな」

僕もつられて空を見上げて……しまった。こうなってしまうたら、僕は黙らなければいけない。そう、この雰囲気、空気。彼女の心がどこかに飛んで行き、あるいは廃墟と一体になり、時が止まってしまったかのように感じられる、この瞬間。僕はあらゆる言動を封じられる。話しかけてしまったら、彼女はとたんに僕に幻滅するんじゃないか、そんな恐怖感が僕の中には今でも渦巻いていた。

「……………」

いつものように顔を空に向けたまま、横目でチラリと榛奈さんの方を見る。彼女は相変わらず空を見上げてボーっとしていた。この時の憂いを湛えたような彼女の顔が、僕はたまらなく好きだ。文明の残骸ともいえるこのボロボロな橋げたの退廃的な美学と彼女の透き通った儂げな表情、僕にはすごく合っているような気がした。彼女は本当は、廃墟の妖精なんじゃないだろうか？　彼女はとにかく、不思議な言動が多い。

「他に……」

突然。

「他に誰か……来るかしら」

榛奈さんが口を開いて、僕は驚愕した。彼女の独り言のようにつぶやきは今までも何度か聞いたことがあるけれど、今回は明らかに違っていた。彼女は僕の方を向いていたのだから。

「え、誰かって……端島じゃなくて？」

「うん。もっと違う人も。倶楽部が大きくなったら、楽しいでしょ？」

楽しい、という言葉は、何だか僕たちの倶楽部には似つかわしくないような気がした。榛奈さん、どうしたんだろう。相変わらず落ちて着いた態度に見えるけれど、何か、何かが違う。いつもの彼女なら、こんな世俗的なことは言わない。勝手な思い込みかもしれないけれど、なぜだか彼女の言った事が妙に引つかかっていた。

「榛奈さんは、静かで落ち着いた場所が好きなんだと思ってたけど、人が多いと騒がしくなるんじゃないかな」

「うん。そうかもしれないけど……でも……」

それっきり榛奈さんは口を閉ざしてしまった。やっぱり僕と二人つきりじゃ、嫌なのかな……。

「ねえ、ずっと前からここにいたんでしょ？ 誰かと会ったりはしなかった？」

「いや、小さい頃は友達と来てたこともあったけど、それ以外は榛奈さんと端島、それだけかな」

「そう……」

榛奈さんが珍しくうつむいた。やっぱり変だ。僕の心はざわついた。何か言わなきゃ、何か気の利いた事を……。そして、思わず。

「ねえ、榛奈さんは他の廃墟、知ってる？」

「えっ？ 他の廃墟？」

「うん。この街、寂れてるだろ。結構廃墟があつてさ」

「へえ、そうなんだ」

「端島とか、僕の他の友達も誘って、今度みんなで行ってみない？」

「みんな？」

「あ、もちろん榛奈さんの友達もよかつたら一緒に、さ。夕暮れじゃないかもしれないけど、一応廃墟倶楽部の活動っぽいし」

「私……」

寂しそうに見えた彼女を励まそうと思って、無意識に僕の口から飛び出た提案。無茶な誘いだったかもしれない。僕は少し出過ぎた真似をしたかもしれないと思いながら、それでも後悔はしていなかった。だって、この提案には全く下心はなかったのだから。

「……………」

彼女はしばらく考えているようだった。そして。

「うん。ありがとう。楽しみだわ」

にっこり笑った彼女を見て、僕は知らず知らずのうちに固く拳を握りしめていた。さすがにガッツポーズはできなかったけれど。

その11

「結構知ってるんだ、廃墟。どんなところがいいかな？」

僕は早速、具体的な計画立案を試みた。

「えっと……きれいで落ち着いたところ、かな」

榛奈さんは考えながら答える。その答えは、僕の思い描いていた彼女の好みにぴったりだった。廃墟といえば、ほとんどの人間は不気味で恐ろしい、不良やホームレスの溜まり場だと考えているだろう。そんな廃墟も確かに少なくはない。でも僕の厳選する廃墟は違う。

「それなら、いい場所を知ってるよ！」

人の手から離れた建造物、それは驚くべき早さで自然の一部と化す。きれいに整備されていたはずの壁も窓も、あつという間に赤茶け、あるいは植物に覆われ、僕たちの住む生きた文明から隠される。こうなってしまうと、それは廃墟というより、もう遺跡と言ってもいい。そして、そんな人と自然の作り出した作品である廃墟は、美しいんだ。今、この場で橋げたを愛する彼女も、それを感じることができるはずだ。僕には確信があった。

「あそこの山、あの中腹にね」

僕はススキ野原からも見える小さな山を指さした。ここからは約10キロほどだろうか。

「誰が住んでたか知らない洋館があるんだ。緑がいつぱいで、きれ

「だよ」

「へえ、見てみたいなあ」

榛奈さんは山の方を見ながら、興味深そうに言った。廃墟めぐりを
していて、本当によかった。彼女の顔を見ながら、僕は心の底から
そう思った。

「洋館の入り口はすごく大きいんだ。だけど、その扉は閉じられて
そこからは入れない。裏に勝手口があつて、その窓、木の枝が突き
破っていた。僕は偶然それを見つけて、カギを開けて入ることがで
きた。中に入ると、すごいんだ。本や調度品が、まるでそのままに
してあるかのように残ってる。僕は最初、まだ人が住んでるんじや
ないかと思つてビクビクしてたんだけど、水も出ないし電気も通つ
てない。何度か行つたけど、やっぱり無人のようだった」

僕は思い出せる限りの廃洋館の情景を彼女に説明した。

「うんうん、それで？ 中を探検したの？」

彼女は興味津々のようで、僕の隣に近寄つて訊いてくる。僕は話を
続けた。

「中は薄暗くてね。厚いカーテンが閉められてるんだ。最初は怖く
て、すぐに引き返したんだけど、その時に見たある光景が忘れられ
なかつたから、思い切つてまた行くことにした」

「その光景って、何？」

「ほら、洋館によくある、外側にせり出したようになってる部分」

「ああ、ベイウィンドウね」

「そ、そう言うのかな。半円形で、床も窓もせり出していた。すごく大きな窓でさ。そこは床から天井まで全部窓なんだ。カーテンはなかったからそこだけ光が入ってきていて、その光がね」

「うん」

「すごくきれいな緑なんだ。きつと外の木やツタのせいだと思うんだけど、ほんとにキラキラ輝く緑で、いくつもの細い筋になって差し込んできていた。最初に逃げ帰った時はとても焦ってたから、それを実際に見たのかどうかすら思い出せなかった。だから、もう一度行っただ」

「それで、その場所は、本当にあつたのね？」

「うん、あつた。次に行ったのはさわやかな初夏の日でさ。洋館の中はひんやり涼しくて、外の木はそよ風で揺れていた。そのたびに光の筋も揺れて、すごく幻想的だったなあ。近くにあつたイスを借りて、そこに座って、窓の外をずっと見てたよ」

「素敵、素敵だわ」

榛奈さんの声が弾んだ。その事ももちろん嬉しかったけれど、僕は廃洋館の事を思い出したことが一番嬉しかった。そうだ。あの張窓はまだ変わらずあるだろうか。最後に行ったのは数年も前のことだ。あの山は登山客もめつたにいないので、洋館も人の目にさらされずに今もひっそりとたたずんでいるはずだ。僕は無性に廃洋館を訪れなくなつた。

「ねえ、私も行っていいかなあ？」

榛奈さんが遠慮がちに言った。僕はすかさず答える。

「もちろんだよ！ そのために話したんだ、僕の秘密の場所！……あ、でも、その洋館は僕の持ち物じゃないんだけど……」

「ふふっ、そうね。荒らさないようにしなきゃ」

彼女が笑う。僕も笑った。

「はは、そうだね。洋館にお邪魔して、ちょっとお茶をぐちそうになる、なんて」

おどけて見せると、彼女がさらに笑う。僕は体中が暖くなるのを感じた。

「じゃ、じゃあさ！ 近いうちに行こうよ！ 僕は端島とか他の友達も誘うから、榛奈さんも誰か連れておいでよ！」

彼女の友達なら、廃墟を踏みじめるようなことはしないだろう。僕は端島にはいささかの不安を抱いていたけれど、奴だってちゃんと言えば大人しくしているに違いない。

「私……私は一人でいいわ」

榛奈さんが笑うのをやめて、静かに言った。それを見て、何だか気まずい気分になった。

「そ、そう？　じゃあ、僕の方が女子を誰か連れてくるよ。それでちよつとは安心してくれるかな？」

「心配なんてしてないよ、私」

彼女が空の方に向き直った。ちよつときれいな夕日が沈むところだった。

〃

「おい！　端島！　おい！」

僕は教室に着くなり端島の机に駆け寄った。

「何だ、珍しいな。お前から来るなんて」

「昨日、昨日な！」

「ああ、昨日の事か。俺は夜まではいなかったけど、面白い情報を手に入れたぞ」

「へえ……いや、そんなことより、榛奈さんだよ！」

「おい！　ちよつと落ち着けて！」

端島が周りを見ながら慌てたように僕に言う。僕は興奮のあまり大声を出していることに気付いていなかった。ハツとして周りを見ると、みんなが僕の方を見ていた。恥ずかしくなって少し黙る。

「……どうしたんだ。何か進展あったか？」

「あ、ああ！ 今度、榛奈さんと出かけることになった！」

僕が嬉しそうに話すと、端島はニヤツと笑った。

「おっ！ デートか！ やったじゃんかよー！」

「いや、デートっていつか……」

「それで、どこ行くんだ？ 映画か？ 遊園地か？」

「いや、廃墟へ……」

「はあ？」

今度は端島が素っ頓狂な声を上げる。またしても周りの視線を集める羽目に。端島は声をひそめた。

「お前、せつかくのチャンスに廃墟って……どういうことだよ」

「しょうがないだろ……榛奈さんって、そういう子だから」

「うーん……ほんと、変な子だよな。でも、よく話できたな、お前。相互不干渉ルールとかいうのがあるんだろ？」

「昨日は珍しく彼女が話しかけてきてさ」

「何だ……彼女がルール破るのはアリなのか。お前、振り回されっぱなしだな」

端島が呆れたように言った。

「まあ、そもそもルールつてのも僕が勝手に考えてただけなのかもしれないしな……それでさ」

僕は端島に用件を伝えた。

「お前も来てほしいんだ」

「……………」

「廃墟倶楽部の活動の一環としてさ」

「……………」

「おい」

「……………わかった、わかったよ。お前にしちゃ出来すぎてると思ったんだ。まあ、上出来だよ。誘えたんだから」

端島はため息をついた。明らかに期待外れだという表情をしている。だけど僕は一向に気にしない。こいつにとっては期待外れでも、僕にとっては大きな前進なんだ。

「あとさ、女子をもう一人か二人、誘いたいんだ。榛奈さんも女人じゃ不安だと思うし」

「女子、なあ……あいにく俺には廃墟好きの知り合いはおらんなあ」

端島が腕組みして考えている。そう。これは無理難題だ。いきなり、

廃墟に行かないか、とそんなに親しくもない男子に誘われて、うな
ずく女子はそうそういない。僕はもう一度教室を見回してみた。友
達のいない僕には、もちろん女子と喋る機会だってほとんどない。
例え相手がクラスメイトだったとしても。

「……ちよつと、何見てんのよ。何か用なの？」

「い、いや、別に……」

ほら、こんなふうに文句を言われるありさまだ。

「……まあ、考えとくさ。せつかくお前が奮闘して手に入れたチャ
ンスだしな」

「ああ、頼むよ」

端島だけが頼り、ということか。情けない事だと我ながら思う。

「ところでさ、金色彗星さ。金の使い道がわかったぞ」

「ああ、地学部か。兵庫先輩が活動費をせしめてるって噂の」

端島が話題を変えた。こいつは昨日、僕が橋げたで榛奈さんと過ご
している間、地学部の活動に参加していた。それはどうやら、金色
彗星とあだ名される、兵庫先輩にまつわる噂の真相を探るためだっ
たようだ。

「どうも、摩耶先輩はでっかい望遠鏡を買いたいらしいな。超高級
の」

「ふーん、まあ、天体観測してるしな」

「ふっしぎだよなあ。望遠鏡は準備室にいっぱい転がってるのに」

「そりゃ、いい望遠鏡はよく見えるんじゃないの。よく知らんが」

「うーん……」

僕は榛奈さんの事で頭がいっぱいで、端島の話はすぐに忘れてしまった。この時はまだ、僕が後に兵庫先輩の野望に深くかかわる事になるなんて、想像もできなかったんだ。

その12

日曜日。

僕は朝早くから起き出して家を出た。コンビニに立ち寄りありったけのパンとおにぎり、お茶を買い込む。

今日は榛奈さんと古びた廃館で会う約束だ。

僕の胸は昨日の晩から高鳴りっぱなしだった。何しろ彼女と橋げたの下以外の場所で会うのは初めてなのだ。ほんの短い間しか一緒にいられない普段の「面会」と今日では状況がまるで違う。本当は彼女を迎えに行ったりしたかったけど、彼女はその申し出をちゃんわりと断った。少し残念だけど、まあ仕方がない。

「よう、待ったか？」

端島と待ち合わせた駅前で落ち合う。廃館は街から少し離れた小さな山の中腹にある。山のふもとまでは電車で行かなければならない。山自体は丘を大きくした程度なので簡単に上ることができる。ただ、そんな何の特徴もない山なので、足を踏み入れる人間はめったにいないようだった。

ホームで端島と世間話をしていると、一両編成の電車がやって来る。なぜ廃線にならないのか誰もが不思議に思っているこの路線を走る電車は、今日もやっぱり僕たち以外に誰も乗せている乗客がない。

「いやあ、いい天気でよかったよなあ」

端島は僕に遠慮しているのか、榛奈さんの事には全く触れなかった。

電車が山に近づくと従ってどんどん無口になっていく僕にも気付いてるんだろすが、それでもバカ話を続けていた。

「来るかな……」

思わずつぶやく。僕の心配はそこだった。

「来る来る！ 大丈夫だよ！」

端島が陽気に言った。

「もし……来なくても……俺も先輩たちもお前に一日付き合ってるから、さー！」

こいつ、本心では半信半疑なんだな。それも仕方がない。廃墟に女の子を誘うなんて普通はあり得ないことだ。

そうこうしているうちに、電車は終点である山のふもとの駅へ着いた。

ホームを下りると、人影が二人。

「おーい！ おっそーい！」

「やあ、おはよう。いい天気で暖かいね」

駅を出たすぐわきに自転車が二台置いてある。兵庫先輩と白石先輩はどつやらここまで自転車で来たらしい。

「遅いったって、電車の時間は決まっていますよ、先輩」

端島が笑いながら言った。

なぜ兵庫先輩と白石先輩がこの場にいるのか、いきさつはこうだ。

〃

「なあ、廃墟にホイホイくる女なんていねえよ」

「うん、まあ……でもなあ……」

僕は榛奈さんに女友達を連れてくると約束してしまったのだ。何と
しても見つけなければ、この素晴らしい廃墟めぐりもお蔵入りにな
ってしまう。僕は内心焦っていた。

「誰か……誰か……」

一生懸命考える僕と端島。奴には思い当る子はいなかったようだ。
僕の場合は友達がいないので、思い当るも何もなくてただ単に誰も誘
えない。

「ねえ、ちょっと君さ、面白いところ行かない？」

端島がクラスの女子に話しかけている。

「面白い所？」

「お化け屋敷ってどうか、まあそんな感じの所」

「は？ 遊園地？」

「いや、まあ人によっては遊園地できるっていうかさ」

「何で私がそんな不気味な所に端島君と行かなきゃいけないのよ」

「いやいや、君だけじゃなくても他の子も誘つといでよ。男でもいいしさ。なあ？」

端島が僕の方を振り向いた。僕のために尽力してくれるのはありがたいけど、こいつはちよつと強引すぎる。

「あんたも行くの？」

「え、うん……まあ」

女子はうんざりしたように端島に向き直り、説教を始めた。

「だめじゃないの、変なことに巻き込んだじゃ。気が弱い友達だからつて振り回すのはいけないわよ」

「何だよ！ むしろ俺の方が付き合ってたってんだっての！」

端島がむっとしたように言い返した。

「端島、もういいから、な」

僕は端島をなだめ、女子に謝る。

「……ごめん、邪魔した」

「まったく、誘うならもうちよつとちゃんとした所がいいわよ」

案の定文句を言われて僕たちはさすがごと退散した。端島はヤレヤレといった雰囲気のため息交じりに言った。

「な、やっぱり難しいわ。廃墟に誘うなんてさ」

「何？ どこに誘うって？」

後ろから聞き覚えのある声がして振り返ると。

「君たち、地学部員を勧誘してるの？ 感心ねえ！ えらいえらい！」

満面の笑みを浮かべて兵庫先輩が立っていた。

「先輩、また勝手に教室に入ってきて……」

「誰も気にしやしないわよ。それより、どう？ 見つけた？ 入部希望者」

「先輩、違いますよ。こいつのデートのために付添い人を探してるんですよ」

端島が苦笑交じりに言った。それを聞いた兵庫先輩は興味津々な顔つきになる。

「ほづほづ、面白いわね。どういこと？」

端島がハツとした表情で僕の方を向いた。うっかりと口を滑らせた事への後悔が表情に現れている。兵庫先輩が言葉を継いだ。

「教えてよ。私も協力できるかもしれないわよ」

ずいっと一步近寄りながら僕に言う。僕は少し悩んだけど、思い切
って兵庫先輩に言ってしまうことにした。僕と端島だけでは八方ふ
さがりなのだ。

）
）

「……ふうん、その廃墟好きの子に来てもらうために他にも女子が
必要、と。へえ」

僕のささやかなたくらみを聞いた後も兵庫先輩は不思議そうな顔を
している。

「変な子ね。ほんとにそんな子なの？ 君の印象がねじ曲がって
だけじゃないの？」

「いやいや、ほんとにちょっと不思議なんですよ。俺も会ったこと
あるけど」

端島が隣で言った。

「……まあいいわ。難しいけど、協力してあげる。地学部には辺境
好きの子もいると思うわ。化石掘ったりしてるしね」

兵庫先輩が得意げな表情に戻る。

「ところで、どこに行くつもりなの？」

「ええと、街外れの小高い山の中腹にある廃館です」

「廃館……?」

「ええ、知ってますか?」

「……………」

「ふもとから見上げてもなかなか見えないんですけど」

「俺も知らなかったな、そんなの」

「……………」

「そこに榛奈さんが興味を持って、一緒に行けたらな、と」

「ありゃ? 兵庫先輩、どしたの?」

「……………私が行くわ」

「へ?」

「女子ならいいんですよ。私が行く」

「は、はあ、そうですか……………」

兵庫先輩が突然決意したように参加を表明する。どうしたんだろう。

「まあ、私は関係ない人間だけど。邪魔はしないわ」

「いや……ありがとうございます」

「そのかわり。次の天体観測に来なさい。いいわね？」

「は……はい」

「端島君。君も」

「ん……んー……まあ、いつか。行きますよ、先輩」

「よしっ！ じゃあ決まりね！ 詳しく決まったら教えてちょうだい」

言い終わらないうちに兵庫先輩は僕たちに背中を向けて教室から出て行った。

「……よかった、のか……？」

「まあ、いいんじゃないか。見つかったんだし」

兵庫先輩はいつも嵐のような人だけど、今回はその性格に感謝すべきなのかもしれない。

くく

天体観測にやって来ると、白石先輩が珍しそうな顔で僕たちを見ながら言った。

「リピーターってのはめったにいないからね。それも二人いっぺんか」

「この子たちは下心があるのよ」

道具を整えながら白石先輩の後ろで兵庫先輩がつぶやいた。

「ふうん。まあやに会いたいのかい？」

「白石！ 呼び方！」

「まあ、あながち間違っではないですよ」

端島がおどけたように言った。

「先輩の協力があるんで」

「お、おい……端島」

僕は慌てて端島を制止した。こいつがまた口を滑らせてしまうんじゃないかとヒヤヒヤする。別に隠すことでもないけど、あまり公にしたい類いのものでもない。だけど、白石先輩はもう兵庫先輩から聞いてすべてを知っているようだった。

「君も面白いね。うちの部長も協力するって言ってるし、健闘を祈るよ。大丈夫、僕は誰にも言わないさ」

白石先輩が爽やかに笑う。考えてみたら、白石先輩に黙って兵庫先輩を勝手に誘ってしまってよかったんだろうか。この二人は付き合ってるような気もするし……本当はどうなんだろう。

「あの、白石先輩もどうですか？」

そんなことを考えながら、思わず僕は誘いの言葉を口走ってしまった。

「僕？」

「ほら、あのコブ山の家」

兵庫先輩がボソッとつぶやいた。

「……まあや、僕も行っていいかい？」

「何で私に了解取るのよ。誘われてんのがあなたでしょ」

白石先輩は少し考えるようなそぶりを見せた後、僕に言った。

「うん。じゃあ、僕も行こうかな」

その13

〃

「何で一緒に来ないのよ」

兵庫先輩が僕に言う。榛奈さんの事だ。

「現地集合なんて、わかってないわね」

「いえ、彼女がそう言うので……」

「ふーん。まあいいわ。それで、どこで待ち合わせしてるの？」

「登山口にある階段です。あそこのふもとで」

僕は山の方を指さす。僕たちは無人駅を出て目的地目指して歩き出していた。点在する家々は、ここいらに広がる畑を所有する農家だろうか。どの家を見てもひと気がないように見えるのは、今日が休日だからかな。

「それにしても、いい天気だねえ」

白石先輩は純粹にハイキングを楽しんでいるように見えた。もともと僕の計画には興味がないのかもしれない。

「なあ……こんな大人数になっちまって、よかったのか？」

ふいに端島が僕のそばに寄ってきて声をひそめて言った。

「誘い過ぎじゃないか？」

「そうかな……いや、そんなことはないさ」

二人つきりじゃない、って時点で、僕にとっては何人いようが一緒だ。それに、はつきりした性格の兵庫先輩が榛奈さんに何か変な事を言いやしないかと僕は内心ハラハラしていたのだ。兵庫先輩のブレーキ役のように見える白石先輩がいてくれた方が、僕にとっては少し安心できる。

「あの白石って先輩、相当モテるぞ。榛奈ちゃんにちよっかい出したらどうすんだ」

端島が変な事を言つて、僕は思わず噴き出した。僕はそんな心配はしたこともなかった。あのキザな白石先輩と廃墟を好む榛奈さんには、どこにも接点がないように見える。

「何？ 楽しそうじゃない」

僕たちの前を歩いていた兵庫先輩が振り返って言った。

「いえ、何でもありませんよ」

端島がとぼける。

「心配……心配、か」

心配といえば、僕にはもつと根本的な心配があった。榛奈さんが本当に来るのかという心配だ。ここに来るには、僕と端島のように電

車で来るか、兵庫先輩たちのように自転車で来るしかない。誰かに車で送ってもらうならともかく、徒歩で町からここまで来るのはおおよそ考えられない。電車なら、そもそも本数が少ないので僕たちと駅で必ず出会うはずなんだ。でも彼女はいなかった。

「なあ、ここって、誰もいないな」

僕はつぶやいた。

「ああ。人が住んでるのが不思議なくらいだ」

端島が答える。駅から歩き出してから、誰にも出会わない。物音といえど、風にそよぐ草の音、鳥のさえずりぐらいだ。僕は無意識に周りをきよろきよろと見回し、榛奈さんの姿を探していた。

「ほんとと、寂れてるわね。ここは。ずーっと」

兵庫先輩のつぶやきは僕には聞こえなかった。

〃

「あ、ほら！ あそこにある階段。あそこです」

僕は石でできた小さな階段を指さした。木々に覆われていて、知らなければ見逃してしまいそうな小さな登山道。おそらく長い間ここを登る人がいなかったんだろう。僕は胸が高鳴り、叫ぶと同時に一人で走り出していた。

「榛奈さん！ いる？」

階段のふもとにたどり着くと。そこには……。

「おはよう。くすっ」

いた。榛奈さんは石段の端にぽつんと座っていた。僕は彼女の姿を見るだけで天にも舞い上がるような気分になる。夕日を背負っていない榛奈さんを初めて見た感動に打ち震えていたのだ。

「あなたが榛奈ちゃんね。初めまして」

後から来た兵庫先輩が榛奈さんに笑いかけた。

「私、この子の保護者として来たのよ。兵庫摩耶。私の事、聞いてる？」

「はい。兵庫先輩、ですね？」

榛奈さんも兵庫先輩に笑いかける。

「この子に意気地がないもんだから。大勢になっちゃったけど、ごめんね」

兵庫先輩がおどけた口調で言った。

「ちょっと、先輩……」

デートとか、そんなんじゃないんだ。いや、そうあってほしいとは思ってたけど……これは廃墟倶楽部の活動なんだ。意気地とか、そんなことは関係ないんだ。

「榛奈ちゃん、久しぶり」

端島もあいさつをする。

「端島君、おはよう。たまには野原の方にも来てね」

「僕は、白石っていうんだ。まあ、保護者の保護者、って感じかな。よろしくね」

「はい。伊香保榛奈です」

こうして人と話している榛奈を見ると、普通の女の子のように見える。こんな言い方は変かもしれないけど。

「さて、と。野暮はナシよ。君たちの計画に従っわ」

兵庫先輩が階段を上り始めた。

「今日は私が許可します」

「ふふっ」

白石先輩が笑う。僕に従うと言いながら、何だかすっかり兵庫先輩のペースのような。

「じゃ、じゃあ、行こうか。榛奈さん。この階段を上ってね……」

「うん」

「上る途中で、脇にそれる道を偶然見つけたんだ。普通なら見逃す

ような道でさ」

石の階段は落ち葉でいっぱいだった。上は木々が階段に覆いかぶさるように枝を伸ばし、まるでトンネルのようになっていた。少し薄暗いここは、地面が滑りやすいこともあって危険かもしれないと思った。

「大丈夫……？」

榛奈さんに向かって手を差しだそうとして、あわてて引つ込めた。手をつないで歩けたら、どんなに幸せな事だろう。なのに僕は、やっぱり意気地がないんだ。

「でもさ、正直ビックリしたよ。榛奈ちゃん、よく来る気になったね」

「そう？ 私、楽しみだよ？」

「今日も制服だね。部活でもあったの？」

「うん……」

榛奈さんと端島は相変わらず気さくな関係だ。端島が榛奈さんに興味ない事がわかっていても、それでもやっぱり僕はヤキモキしてしまう。もっとも、端島もそこまで空気の読めない男じゃない。ひと通り世間話を終えた後は、僕たちの数段下を黙々と歩いていった。

「どうやってここまで来たの？ 電車で会えるかもしれないって思ってたけど」

「歩いて来たわ」

「え？　どこまで？」

「うん。歩くの、好きなもの」

「そうなんだ……」

けっこう行動的なのかなあ。何だか榛奈さんの新しい顔を発見しているような気分になった。ただ相変わらず彼女からは何も聞いて来ないので、会話といっても僕が質問攻めしているような形になってしまう。自分の会話力の無さを内心大いに恥じた。

「疲れてない？」

「大丈夫よ」

そうこうしているうちに、例の隠し小道までたどり着いた。ここを奥に入って行くと、洋館が姿を現すんだ。初めてそれを発見したときの感動は、今でも忘れられない。

「あの……」

先に行く兵庫先輩と白石先輩にそれを伝えようとした時。

「ふん、ほんと寂れちゃってるわね」

「ふふっ、たまに整備しに来るかい？」

「何で私が！」

二人は何の躊躇もなくその奥道に入って行った。

「あれ？」

よっぽど気を付けないと分からない道なのに、二人はまるでその場所を最初から知っているかのようにだった。僕は不思議な気分になる。

「あの道なの？」

榛奈さんが僕に訊いた。

「うん。そうだよ」

さすが地学部というか、普段から注意深く物事を探るような活動をしている人たちには、こんな小道を見つけるのは造作もない事なのかもしれない。

「気を付けてね。枝に引っかからないように」

「うん、ありがとう」

榛奈さんとこんなやり取りをしている僕が、自分自身たまらなく頼もしく感じた。

（

「うわ……あ」

端島が小さく声を漏らす。そう。僕が初めてここに来た時も同じだ

った。人ひとりやつと通れる小道の先にあるとは思えないほどにだ
だっ広く切り開いた平地。そこにそびえる洋館。ある種の圧倒を覚
える瞬間だ。その洋館も今では古びた廃墟と化し、圧倒感に不気味
さも増し加わっていた。

「これ、これですよ！ 兵庫先輩、白石先輩！」

「……見りゃわかるわよ」

「どう？ すごいだろ、榛奈さん！」

「ええ。そうね」

「お前、ちよつと落ち着けて」

「この中が、もっとすごいんだ！」

「……入るの？」

兵庫先輩がつぶやくように言った。

「ええ！ せつかく来たんですから！」

僕はどうしても榛奈さんにこの中の幻想的風景を見せたかった。直
前まで人が住んでいたような不思議な空間に、大きな出窓から差し
込む幾筋もの光。

「……いいわ。じゃあ、行きましょう」

兵庫先輩がため息交じりに言った。

「まあ……私も……入ってみたい気分だわ。今日は」

「そうですね！ 行きましようよ！」

「中に入っても大丈夫？」

榛奈さんが僕を上目づかいで見る。

「もちろん！ いや……うん。大丈夫、きっと」

「俺も行くよ。探検っぽくて楽しそうだしな」

「じゃあ、決まりね。入りましようか」

「ええ！」

僕が興奮気味に返事をした、その時。

「僕は……待ってるよ。ここだね」

白石先輩は相変わらずのかわいこい微笑のまま、さらりと言った。

「え？ どうしてですか？」

「怖いのよ」

兵庫先輩が代わりに答える。

「こういう場所、てんでダメなんだから。白石ったら」

「いやいや……見張りだって必要だろ？ まあや」

「カッコつけちゃって。いいわ。そこで待ってなさいよ」

僕は一人でやたらと興奮していた。数年前に味わった静かな感動にもう一度出会えるであろう喜び、それを好きな子と共有できる幸せ、そして人里離れた立派な廃洋館を僕たちだけが知っていて、まさにそこに侵入しようとする甘美な背徳感、そんなものがごちゃごちゃになって僕の気持ちの中に渦巻いていた。

「何かあつたら呼んでくれよ。僕はずっとここにいるから」

白石先輩は相変わらず落ち着いていた。先輩にとって廃墟を彷徨うなんて行為は、およそ馬鹿げていて幼稚な遊びに見えるのかもしれない。先輩、もつたいな。僕はそんなことを勝手に思った。

「あの、パンと飲み物、よかったらどうぞ。たくさん買ってきたので」

「おや、気が利くね。じゃあ、飲み物だけ。ありがとう」

白石先輩は僕が差し出したコンビニのビニール袋の中から飲み物をつまみ出すと、そばにあった大きな石に腰を下ろした。僕は兵庫先輩の言っていたことが少し気になって、声をひそめて訊いてみた。

「本当のところはどうなんですか？ やっぱり中は嫌ですか？」

「中は……怖いな。はは」

白石先輩は自分の気持ちを隠そうとはしなかった。

「白石、退屈したって知らないわよ。勝手に帰っちゃダメなんだから」

「退屈はしないさ。たぶん、しなくなる」

白石先輩は静かに言った。

「じゃあ、榛奈さん。行こうよ」

僕は榛奈さんの方を振り向いた。榛奈さんもやっぱり落ち着いている。僕と同じような感動を覚えてくれるかと少しだけ期待していたけど、彼女は僕の予測通り動いてくれるほど甘くはない。彼女はどこまでも謎めいているんだ。まあいいさ、中に入ってからが本当の勝負だ。

「ええ、行きましょうか」

榛奈さんが僕に笑いかける。手を差しだそうか迷いに迷って、僕はやっぱり差し出すことはできなかった。

「こつちだよ。表の扉は開かないんだ。裏に回って勝手口から入れるから」

僕はそう言いながら建物の裏に向かって走り出した。

「ちょっと、待てよ」

端島も慌てて付いてくる。僕は早く中に入ろうと少し焦っていた。それなのに、腐りきって建物の方に倒れ掛かっている古い木々が邪魔をしてなかなか裏に回ることができない。建物のすぐ背後には、

木々がうつそうと生い茂る山の斜面が迫っていた。

「おつかしいなあ、前はすぐに行けたんだよ」

「そりゃ、誰も刈り込まなきゃこうなるだろ」

木々の枝の間に潜り込もうと四苦八苦している僕と端島を見たのか、榛奈さんは相変わらず建物の表側にとどまっているようだ。

「おい、摩耶先輩と榛奈ちゃん、何してんだらう」

「さあ……」

彼女たちのためにもこの木々をどけておかなければならない。前に立ちはだかる枝を大きく押しのけたり、払ったりしていると、不意に背後から声があった。

「何してんの。ほら、さっさと来なさいよ」

兵庫先輩が僕たちを呼んでいる。

「玄関、開いてるわよ」

「へ？」

）
）

表の大きな扉は、確かに開いていた。前に僕が来た時はびくともしなかったのに、今はまるで僕たちを歓迎するかのように大きく開け放たれている。時が経って鍵が壊れたのか、あるいは他の侵入者に

よって壊されたのか……。

「何だよ」

端島がつぶやいた。榛奈さんは扉の前で僕たちを待っていた。

「この扉、簡単に開いた？」

「うん。先輩が開けてくれたわ」

「ふーん……」

僕たちは中を覗き込んだ。多くの洋館の例に違わず、扉の向こうには大きな玄関ホールが広がっていた。建物の中はどこもかしこもひんやりとしていて薄暗い。一人で来た時は不気味でしよがなかつたここも、廃墟倶楽部の仲間と来ている今は胸を高鳴らせる魅惑的な空間だ。ただ、僕には違和感があった。

「こんなに荒れてたかな……」

僕が前に来た時は、まるで人が住み続けているかのような空気があった。家具や調度品も綺麗に整っていて、ほこりっぽくはあつたけど、何というか、秩序立っていたのだ。でも、今は違う。床はところどころ抜けていて、得体のしれない木やら金属やらの切れ端が方々に散らかっている。鉄サビの独特の刺激臭と土気を帯びたすえた臭いが混ざり込み、僕の鼻の奥を刺す。階上のどこかの窓が割れているのか、上の方でヒューヒューと風の通る音が聞こえる。窓にかかっていたカーテンらしき布切れが廊下の向こうでヒラヒラと揺れているのが少しだけ見えた。

「まさに廃墟、って感じだな」

端島が言った。確かに、幻想的と形容できるようなものじゃない。僕は少しがっかりした。

「こんなに……なってるのね……」

兵庫先輩は何のためらいもなく中に入っていた。物怖じしない人だとは思っていたけど、こんな不気味な廃館に来ても先輩の顔には恐怖の色は微塵もうかがえない。僕たちは先輩に続いて中に入った。

「……………」

榛奈さんは黙って僕の後に続いた。相変わらずすました顔をしているので、僕には彼女が何を感じているのかよくわからない。

「あ……先輩、見せたい場所なんですけど……」

僕はどんどん先へ進もうとする兵庫先輩を呼びとめた。先輩はゆっくり振り返る。何だかひどく真剣な表情をしていた。

「私は一人でいいわ。表でまた落ち合いましょう」

そう言うと、先輩はそばにあった部屋に入ってしまった。

「なんか変だな、摩耶先輩」

「うん」

「一人で危険じゃないか？」

「そうかも……なあ」

「俺、とりあえず摩耶先輩の近くにいたるわ」

「じゃあ、僕も……榛奈さん、いい？」

「いやいや、お前と榛奈ちゃんは別にいいよ。行きたい場所があるんだろ？ 行ってこいよ」

端島は親指を立てると僕にニヤリと笑いかけた。

「広いったって学校ほどじゃないし、見失うほど離れる事もないだろうし。何かあったらすぐに表に出ればいいしな」

「ん……」

まあ、そうかもしれない。僕はとにかくあの場所が気になっていた。以前ここに来た時、魂を引き込まれてしまったかのように佇み続けた、あの場所が。

「……榛奈さん。行くこうか」

「うん」

榛奈さんはただ僕に従うつもりのようにだった。彼女のペースになりがちな橋げたでの時間とは全く違うことに、僕は妙な戸惑いと緊張感を持った。彼女を失望させてはいけない。絶対に。僕は心の中で覚悟を決めた。

「階段を上るんだ。二階の廊下の途中にそれはある」

「うん」

大きな階段のふもとまで来て、上の方を軽く見わたす。床が抜けな
いか慎重に確かめながら、僕は榛奈さんの前を行った。僕が一步進
むごとにギシギシと階段がきしむ。なのに榛奈さんは音をほとんど
立てない。彼女はまるでカモシカのようにだ。

「階段は大丈夫みたいだね」

「うん。そうね」

結構しつかりした作りになっているらしく、音はするものの僕たち
が乗ってもびくともしないようだ。そうこうしているうちに、二階
にたどり着く。目の前に左右に走る廊下が現れた。僕たちはそこに
立つと、ゆっくりと両方向に目をやった。

「……………あれね」

榛奈さんが一方の廊下の奥を指さした。

「……………うん」

薄暗い廊下に差し込む光。そう、あの時もすぐに目についた。全面
ガラス張りの大きな出窓、あの場所だけはスポットライトを浴びて
いるかのような特別な空間なんだ。僕は再びやってきた。榛奈さん
と一緒に。

「きれいね……………きれいだわ」

榛奈さんがつぶやく。僕はその事がたまらなくうれしかった。彼女と感動を共有できた。そしてそれを僕自身が伝えることができたんだ。荒廃した館に隠されたキラキラ光る宝石。

「行ってみよう。近くで見るともつときれいだよ」

「あっ、気を付けてね」

走り出そうとする僕に榛奈さんが声をかけた。今は廊下の床ももろくなっているかもしれない。すっかり忘れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、夕暮れ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6963u/>

夕暮れ廃墟倶楽部

2011年10月19日08時12分発行